

弥生時代後期における甕形土器の採用比率とその背景

— 滋賀県を中心として —

山下 優介

要旨

本稿は、弥生時代後期に強い独自性をもつ地域として重要視されてきた近江地域に着眼し、独自性の実態とその背景を具体的な資料にもとづいて論証することを目的としている。第一の分析として、周辺地域を含めた各遺跡の甕形土器を対象に、口縁形状の採用比率を求めた。その結果、以前から弥生時代後期の近江地域における独自性と考えられていた「受口状口縁甕」を主体的に採用する地域は限定的であることが確認され、この遺物を近江地域の独自性として理解することの妥当性を客観的に示すことができた。この結果を踏まえて、第二に、受口状口縁甕を主体的に使用する集落の面積を実際に測定して比較をおこない、それらの集落規模に大小の差異が存在していたことを明らかにした。さらに、甕形土器で確認された共通性の背景に関する考察を深めるため、第三の分析対象として独立棟持柱建物を用いた。この種の建物が滋賀県内の各小地域で検出されていることや、集落規模と建物の規模の対応関係などから、独立棟持柱建物を有する集落間では甕形土器にうかがえる日常的な人やものの交流関係のみならず、首長層の間にも緊密な交流関係が存在したことを推察した。以上の3要素を対象とした基礎的な分析の結果、弥生時代後期に琵琶湖を介した交流関係が活発であったことを実証的に説明した。この成果により、湖南地域に偏重した小地域的な評価から脱却し、近江地域を、湖岸一帯の強い結びつきをもとに弥生・古墳時代移行期の情報交流を促進した地域として理解する素地をつくった。

1. はじめに

弥生時代後期の社会を復元していくうえで欠かすことのできない地域のひとつとして、琵琶湖沿岸一帯に広がる「近江地域」¹⁾が注目されて久しい。古くは野洲市大岩山から出土した複数埋納銅鐸が著名な考古事象として知られるが、1990年代以降の発掘調査により、近年さらに当該地域への関心が高まってきている。

守山市伊勢遺跡では、区画された中心施設をもつ20ha超の集落内に、複数の独立棟持柱建物が弧状に検出され、他地域には見られない当該期の特異な集落遺跡の状況が示されている。湖岸の各地では、定型的な前方後円墳に先駆けて、弥生時代の終末期に前方後方形の墳墓がいくつもみつまっている点も特徴的な事象としてあげられる。

最近では、大韓民国慶尚南道金海市会峴里貝塚における近江系土器の出土が報告されたほか、高島市上御殿遺跡からは大陸に系譜をもつ双環柄頭短剣の鋳型が発見され、今や日本列島を超えた視野での議論が必要とされる地域であることは疑いがない。

近江地域における弥生時代の新発見が続々と報告される一方で、地域内部に関する検討は十分に進んでいない現状がある。既存の研究には、伊勢遺跡など

を中心とする琵琶湖南岸地域を対象とした議論が目立ち²⁾、湖岸一帯を視野に入れた基礎的な分析は、近年までほとんどおこなわれていないといえるだろう。

しかし、新たな発見例は湖南地域以外からも多く、琵琶湖沿岸一帯としての近江地域をあらためて評価する必要性が生じている。この問題は既に多くの研究者の共通認識であり、森岡秀人は琵琶湖の湖上交通と集落間の交流に目を向け、「琵琶湖は沿岸の諸地域を選択的ではあるにせよ、緊結したものといえ、グローバルには瀬戸内・伊勢湾沿岸や内陸部と日本海沿岸を最短で結びつける役割を果たした点をもっと評価すべきだろう」（森岡 2000：114）と述べた。

森岡が示唆するように、琵琶湖を利用した交通の要衝としての役割を近江地域に与えようとした場合、湖岸一帯の小地域間関係の把握が前提として不可欠である。琵琶湖を介した交通関係の存在を具体的に示すことで、地域を跨いだ広範囲におよぶ交流を実証的に説明することが可能となる。

しかしながら、湖南地域の特異性が強調される現状では、前提となる交通関係が正しく評価されないばかりでなく、湖南地域の孤立したイメージを強めることになりかねない。近江地域を、弥生時代後期のものや人の動きに大きく関与した最重要地域のひとつとして評価するためには、湖南地域の突出性だけでなく、独自

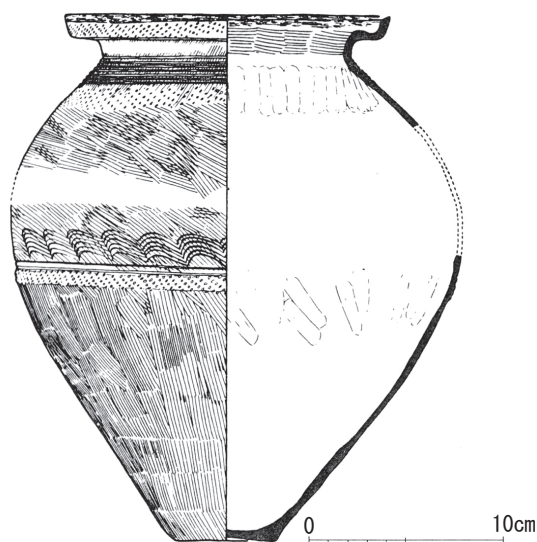


図1 代表的な「受口状口縁甕」例

性を生み出す要因となった地域内部の交流関係を明らかにしなければならない。

このような課題を解決するため、本稿では小地域間関係を明らかにする基礎的な分析にもとづいて、琵琶湖に面した交流関係の存在を証明することを目指す。交流の存在だけでなく、各小地域がどのような関係性をもって結びついていたのか、その実態を把握することを目的としている。

目的の達成に向けて、第一に各遺跡における甕形土器の採用状況を分析する。この分析によって周辺地域との差を検討し、前提としている「近江地域」という認識の有効性を示す。そして、第二に集落規模、第三に集落内の特殊建物遺構の状況を検討し、それぞれの分析結果を相互に補強するかたちで小地域間の関係性を考察する。

本稿の基礎となる分析に甕形土器³⁾を用いた理由は、これらが弥生時代後期の近江地域における代表的な特色の一つと考えられるためである。特色の内容や既存の研究動向は次章で述べるが、先行研究と照らしても、近江地域特有の考古事象として知られるこれらを対象とすることで、他地域と比較した際の近江地域という区分の妥当性をより客観的に検討できると判断した。

そして、甕形土器は各遺跡から普遍的に出土するうえに、日常的な煮沸具としての使用が推定される。そ

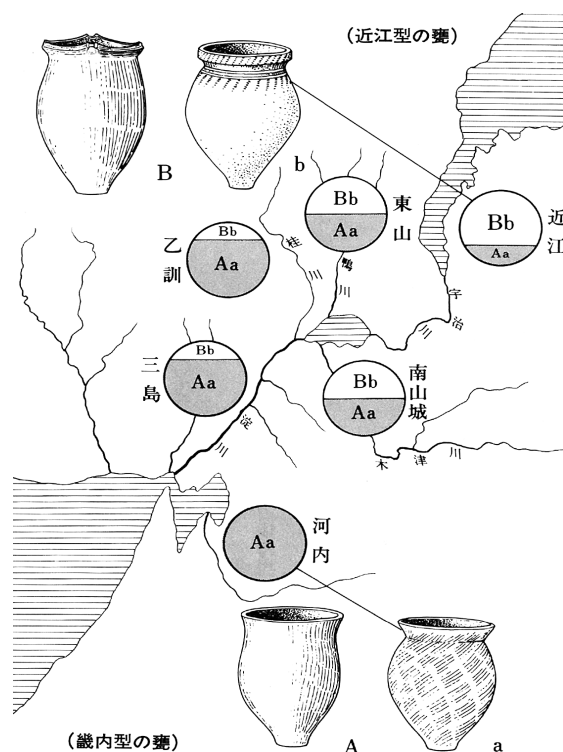


図2 織内型の甕と近江型の甕

のような遺物の性質上、恒常的な地域間の交流関係を評価するうえで適当な遺物と考えられる。このことも選択の理由として大きい。

2. 先行研究と本稿の方針

弥生時代後期の近江地域に特有な甕形土器は、その形状的な特徴から「受口状口縁甕」と呼称され、既に1970年代後半には近江地域の特色として理解されていた（滋賀県教育委員会 1976）。その特徴を簡潔に述べると、外反して伸びた口縁部の端部が受口状に立ち上がり、外面には櫛および篋状工具による文様が施される平底の甕形土器といえる（図1）。

佐原真が近江地域の地域色として着眼し（佐原 1960）、「近江型の甕」等の名前で呼ばれていた第Ⅱ様式にみられる甕形土器とともに、受口状口縁甕は近江地域の弥生土器に表れる地域色を考察するうえで重要な要素として扱われた。これらの認識にもとづいて、弥生土器にみられる地域色のありかたを検討したのが都出比呂志であった。

都出は、地域色の差を把握する方法の一つとして、第Ⅱ様式および第Ⅴ様式における「織内型の甕」と「近江型の甕」の共存比率をもとめ、淀川水系内の小地域ごとに比率が異なることを端的に示した（図2）。

接触域をもたない河内と近江の二地域を比較した場合に、その中間地帯の淀川水系内部において二類型

の混合比率が漸移的に変化する。この現象を示したことで、小地域における中間色的な地域色のあらわれ方を説明した（都出 1979）。

都出の指摘のねらいは、中間的な色合いが生じることを根拠として、地域色の背景に土器作者である女性の移動や接触の範囲を推定するものであった。目的は様々であるが、甕形土器を対象として共存比率をもとめる分析手法は、近年の滋賀県内遺跡調査に関する報告書等にも継続的に採用される（平井他 2008）。

この手法をさらに発展させて取り組んだ近年の研究に、中居和志の論考が知られる。中居は甕のみならず、近江地域独自の器種と認識されている受口状口縁をもつ壺・甕・鉢に、高杯を加えて分析をおこなった。弥生時代後期中葉から庄内式併行期前半にかけて、近江地域およびその周辺地域の遺跡を対象とし、時期的な採用状況の変化を地域ごとに明らかにした。そのうえで変化の背景を考察している（中居 2013）。

中居の分析によれば、中居がⅠ期とした弥生時代後期中葉に、近江地域周辺各地においても盛行した受口状口縁壺および甕は、後期後葉とされたⅡ期には近江地域以外では退潮傾向となる。そして、庄内式併行期前半とされるⅢ期になると、受口状口縁壺は近江地域でもほとんどみられなくなる。甕に関しては各地に残るものの、近江地域を除いて甕の主体を占めることはなくなり、近江地域内においても多寡が認められる。また、受口状口縁鉢については、受口状口縁甕との比率に注目して分析が進められた。近江地域ではⅠ・Ⅱ期を通じて甕に対して 2 割前後を基本とするが、Ⅲ期に激減する。しかし、周辺地域ではⅢ期にも在地化したこの種の鉢が残る遺跡が存在する。

以上のような受口状口縁土器の採用状況の変遷のなかでも、中居は近江地域の甕と鉢に着眼している。Ⅰ・Ⅱ期における両者を、調理用途に応じて作り分けられた煮沸具として理解した。そのため、Ⅰ・Ⅱ期に煮沸具として受口状口縁甕・鉢を用いる地域には、近江地域と共通した食材や調理法を用いた食文化があったことを想定している。さらに、Ⅲ期の近江地域における受口状口縁鉢の激減を、庄内式併行期の交流の活発化によって独自の食文化が変容した結果と考えた。

近江地域における食文化の変化という問題については本稿の論ずるところではない。しかしながら、中居が先駆的に示した周辺地域を含めた弥生時代後期後葉の受口状口縁土器の採用状況については、本稿でも別の問題意識にもとづいて再検討する。

先述のように本稿の課題の一つは、琵琶湖沿岸の小

地域間関係を具体化することである。したがって、筆者の分析は、湖岸各地の甕形土器の採用状況と周辺地域の状況を比較して客観的な評価を与えることを主眼としており、中居の目的とは異なる。しかし、甕形土器の口縁形状によって各遺跡の採用比率を求めるという方法の原理は、中居と同様であると考えられる。

次に、土器の検討を補う目的で着手する、集落規模および特殊建物遺構に関係した研究の動向について簡潔に述べる。対象地域の集落研究は、膨大な発掘成果の蓄積や整理が進む 1990 年代後半以降、滋賀県内の研究者たちによって進められてきた。代表的な成果には、『みずほ』誌上における「小特集：琵琶湖周辺における集落の様相」がある。湖西・湖南・湖東・湖北の各担当者が弥生時代集落遺跡の動態の把握に努めた（植田 2000；伴野 2000；松室 2000；横井川 2000）。各報告者は小地域内の中小河川ごとに、規模が比較的大きくその地域の拠点としてとらえられる遺跡を、弥生時代の前期から後期にわたって紹介している。

各担当者はそのほかにも、近江地域における弥生時代研究の重要課題となる複数の話題にふれている。横井川博之は湖西地域の高地性集落の動態や住居の平面形態、墓域の変遷、あるいは熊野本遺跡の土器様相に注目した（横井川 2000）。伴野幸一は野洲川左岸の遺跡群の消長関係や伊勢遺跡・下鈎遺跡・下長遺跡といった大規模遺跡の内容から、近江南部地域の特質を検討している（伴野 2000）。植田文雄は湖東地域の掘立柱建物による集落構成や、環濠集落と高地性集落、方形周溝墓、土器様相にみえる濃尾平野の影響についてふれている（植田 2000）。松室孝樹は居住域と墓域の関係性からみた集落構成を論じるほか、五村遺跡や西円寺遺跡などの円形周溝墓や鴨田遺跡の前方後円形周溝墓、法勝寺遺跡や高月南遺跡の前方後方形周溝墓といった湖北地域の墓制の在り方への着眼や、湖北地域における玉作りや鉄器生産への視点も提示されている（松室 2000）。

これらと前後するかたちで湖南地域に主眼を置いた分析も積極的に進められた。佐伯英樹は近江地域における弥生時代後期の環濠集落の内容を概観し、それらの遺跡で確認されている大型建物の評価をおこなった（佐伯 1995）。

近藤広は湖南地域の弥生時代中・後期の集落を対象とし、集落の展開と画期、中・後期の出土遺物の変化、集落規模と集落内の様相の 3 点に着目した（近藤 1998）。近藤はその後、湖南地域の集落の検討に加え、墓制・住居形態・農業生産・鉄製品および銅製品の生

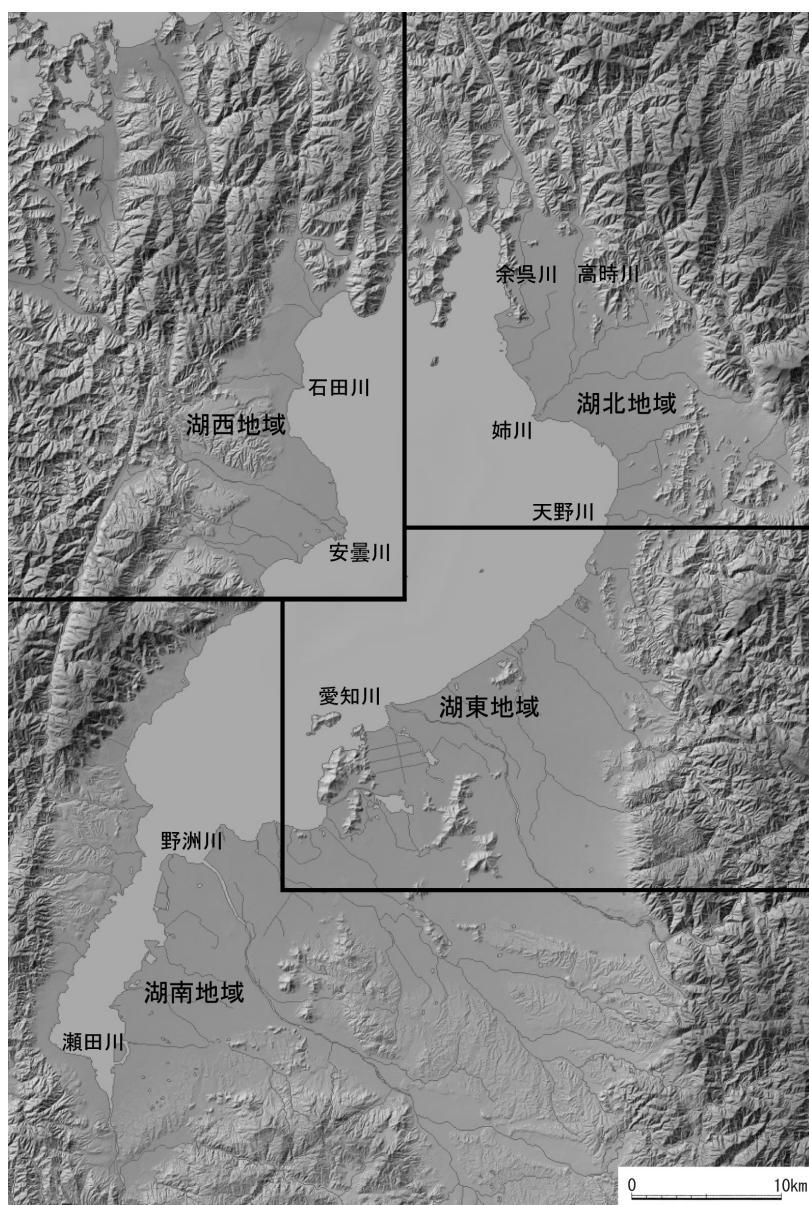


図3 滋賀県内の小地域区分

産と流通に関して変遷観を示した(近藤 2009)。

ここまでの研究成果を踏まえ、戸塚洋輔によって湖東南部地域から湖南地域までを含めた集落動態の大規模な集成研究がおこなわれた(戸塚 2016)。対象地域の弥生時代後期から古墳時代中期までを視野に入れ、集落の消長・集落の構造・墓域・手工業生産の様相までを幅広く扱っている。

戸塚が提示した集落動態表をはじめ、いずれの研究も蓄積された膨大な情報を元に整理されたものであり、個別事例に関する記述も十分におこなわれる。し

かし、本稿が目指す近江地域内の小地域間関係を視野に入れて論じられたものは決して多くない。

そのような研究動向をふまえ、本稿では集落間関係を理解するための基礎的な要素として近年再び注目されている集落面積(桑原 2012a・2012b)に着目する。甕形土器を対象に明らかにした地域間関係を、集落面積の比較をおこなうことでさらに深く検討することを目的とする。

最後に、補足的な分析の第二の対象としてあげた特殊建物遺構に関する研究についてふれる。本稿で扱う

表 1 本稿で採用する編年の併行関係

近江	若狭・越前	美濃・尾張・伊勢	山城
後期中・新 (伴野 2000)	法仏 1～4 式 (堀 2006)	山中 I・II 式 (赤塚 2002)	佐山 I－1 式～ I－3 式 (高野 2003)

特殊建物遺構とは「独立棟持柱建物」⁴⁾と呼ばれる掘立柱建物遺構である。この種の建物を対象とした研究は、近江地域に限定せずとも各地の事例を対象に盛んに議論されてきた。よく知られる例として、大阪府和泉市池上曾根遺跡や兵庫県尼崎市武庫庄遺跡、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡のものが存在する。

上記の代表的な事例はすべて弥生時代中期に属する例であることに対して、近江地域で発見されている伊勢遺跡をはじめとした事例は、弥生時代後期後半以降のものが多い。このように特異な状況をみせる近江地域の独立棟持柱建物については、過去にも検討されたことがある。

近藤広は近江地域の大型建物および特殊な方形区画をもつ集落として下之郷遺跡、伊勢遺跡、下鈎遺跡の事例を中心に、滋賀県内の独立棟持柱建物の集成をおこなっている(近藤 2006b)。森岡秀人は近江地域に限らず近畿地方の大型建物を対象に分類をおこない、伊勢遺跡の独立棟持柱建物に着目することで「伊勢型」として類型化している(森岡 2006)。近藤はさらに、独立棟持柱建物の梁行と桁行の規模に関する分析にもとづいて 2 つのグループを設定し、建物の規模に応じた役割の差異について示唆的に言及している。

本稿では近江地域の各事例のあり方の検討に加え、集落面積分析との対応関係を論じることで、これまで十分に追究されていない独立棟持柱建物からみた集落間関係を考察する。

ここまでみてきたように、各分野で研究の蓄積は進むが近江地域内の小地域間関係を説明しようとする取り組みは低調といわざるをえない。研究の進展とともに重要性が一層認識されるようになった近江地域を今後評価していくためには、小地域間関係を基礎的な分析にもとづいて明らかにし、具体的な検証のないまま今に至っている「近江地域」という枠組みの妥当性を判断する必要がある。

以上の課題を解消するために本稿は、まず、早くから近江地域の特色と認識されてきた受口状口縁甕に着目する。甕形土器によって近江地域の独自性の実態を具体的に示したうえで、次に、整理の進む各集落の情

報をもとに、集落面積、独立棟持柱建物のあり方、そして規模を比較する。実際には、第四章で甕形土器を対象とした分析を扱い、第五章で集落規模、第六章で独立棟持柱建物遺構を扱う。最後に、第七章で三つの分析結果の総括をおこない、小地域間関係の解明を試みる。

3. 対象と時間軸

3-1. 分析対象

分析対象とした土器が出土した遺跡は、近江地域を中心としてその周辺地域にあたる山城・美濃・尾張・伊勢・若狭・越前地域より抽出した。分析資料は、各遺跡のなかでも竪穴建物や周溝付建物などの建物遺構を中心とした遺構にともなう資料に限り、建物遺構が判然としない場合には時期が限定される溝遺構出土遺物を使用した。

3-2. 小地域区分(図 3)

本稿で使用する、湖北・湖東・湖南・湖西地域といった近江地域内の 4 地域区分は、杉本源造による河川を中心とした地域区分に基本的に則っている(杉本 1989)。「湖北地域」は余呉川流域・高時川流域・姉川流域・天野川流域を指す。杉本が「基礎地域Ⅱ 湖東北部地域」とした犬上川流域は、「基礎地域Ⅲ 湖東南部地域」と設定された愛知川流域・大中の湖周辺域・白鳥川流域・日野川中流域を含めて、本稿では「湖東地域」と扱う。また、野洲川北岸地域および野洲川南岸地域を「湖南地域」とする区分に従う。ただし、杉本が北大津地域・比叡山東麓地域を指した「基礎地域Ⅴ 比叡山東麓地域」も本稿では湖南地域に含めることとした。本稿で使用する「湖西地域」は、石田川流域および安曇川流域を指す。

3-3. 時間軸

対象とした時期は、湖南地域に関して伴野幸一が設定した、弥生時代後期中・新(伴野 2000・2006)とし⁵⁾、対象地域における編年観との併行関係は暫定的に表のとおりとする⁶⁾(表 1)。

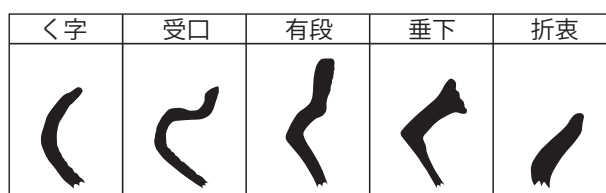


図4 口縁形状分類案

4. 弥生後期後半における甕形土器の採用状況

4-1. 分析の概要と目的

この章では、実際に甕形土器を対象として分析を進める。第一に、対象とした各資料群における甕口縁形状の分類をおこない、その採用比率を求める。第二に、受口状口縁甕を主体的に採用する各遺跡について、その内訳を詳細に検討することで受口状口縁甕の共通点や相違点を明らかにする。

第一の分析により、近江地域の独自性と認識されてきた受口状口縁甕がどのように採用されたかという問題について、より具体的かつ客観的に評価することが可能となる。そして、第二の分析を加えることで、受口状口縁甕を主体的に採用する地域間の関係性を考察することができる。

受口状口縁を甕形土器に採用するという行為について、土器製作者の習慣が強く反映されているととらえることは自然といえるだろう。また、内容物の運搬や供献を目的とした広範囲の移動が知られる壺形土器に対して、日用的な煮沸具と考えられる甕形土器の移動範囲は基本的に狭いことが理解されている。

くわえて、本稿で分析対象とした時期は、甕形土器にみられる地域色の顕在化⁷⁾が知られる時期であり、口縁の形状は甕形土器の形態と強く関係している。以上の項目を考慮すると、口縁形状に対し、生活文化の共通性を示す指標としての意義を見出すことは不可能ではないと思われる⁸⁾。したがって、本稿では、日常的な交流の頻度を検証するために甕形土器の口縁形状採用率を求める手法を採る。

4-2. 口縁形状の分類

採用比率を求めるにあたって、口縁の形状を5類型に分類した(図4)。

①「く字」は、頸部から上方に向かって、直線的あるいは緩やかに外反しながら単純に伸び、明瞭な屈曲部をもたずに口縁部が成形される例である。②「受口」は、頸部から伸びた口縁部が、明瞭な屈曲部をもって

上方につくり出される例である。③「有段」は、頸部から伸びた口縁部が明瞭な屈曲部をもって上方につくり出される例である。そのうえ、口縁部側面が幅広の面をもち、本稿で対象とした遺跡では擬凹線が施されることが多い⁹⁾。④「垂下」は、頸部から外反して伸びた口縁部が、端部に明瞭な外傾気味の平坦面をもって下方にはみ出すなどして垂下した例である。⑤「折衷」は、すでに述べた4種類のうち2種の要素を併せもち、どちらかに判別することが困難な例である。図4にはく字と受口の折衷例を示した。そのほかに、先に述べた5種類のいずれにも該当せず、数%未満存在する別要素をもった例を⑥「別系統」として扱った。

4-3. 各遺跡における甕口縁形状の採用比率

各遺跡における口縁形状の比率は図の通りである(図5, 6)。この図をみる限り、滋賀県内の遺跡において受口状口縁甕が極めて主体的な比率を占めることがわかる。湖南地域にあたる守山市伊勢遺跡、草津市柳津遺跡、大津市関津遺跡と、湖東地域に所在する東近江市石田遺跡では、いずれも受口甕¹⁰⁾が80%を超え、湖北・湖西地域の長浜市大塚遺跡と高島市針江北遺跡でも70%程度が受口甕である。

大塚遺跡と針江北遺跡では、純粋な受口甕の比率は滋賀県内の他の遺跡に比べて若干低い、折衷的な口縁形状とした例のうち、針江北遺跡の1例を除いたすべてが受口とほかの形状との折衷形である。そのため、グラフでもよくわかるように、滋賀県外の遺跡と比較した際には受口甕の主体性が高い地域と評価することができる。

受口甕の高い主体性がみられた地域であっても、一定数のく字甕が確認されることはすでに言及されてきたことである(中居2013)。筆者の分析においても15%前後の値であったことから同様の結果が得られたといえる。伊勢遺跡において受口甕に一極化する結果は興味深い、伊勢遺跡の対象遺構それぞれの遺物量が不十分であったため、具体的な解釈を加えることは保留すべきである。

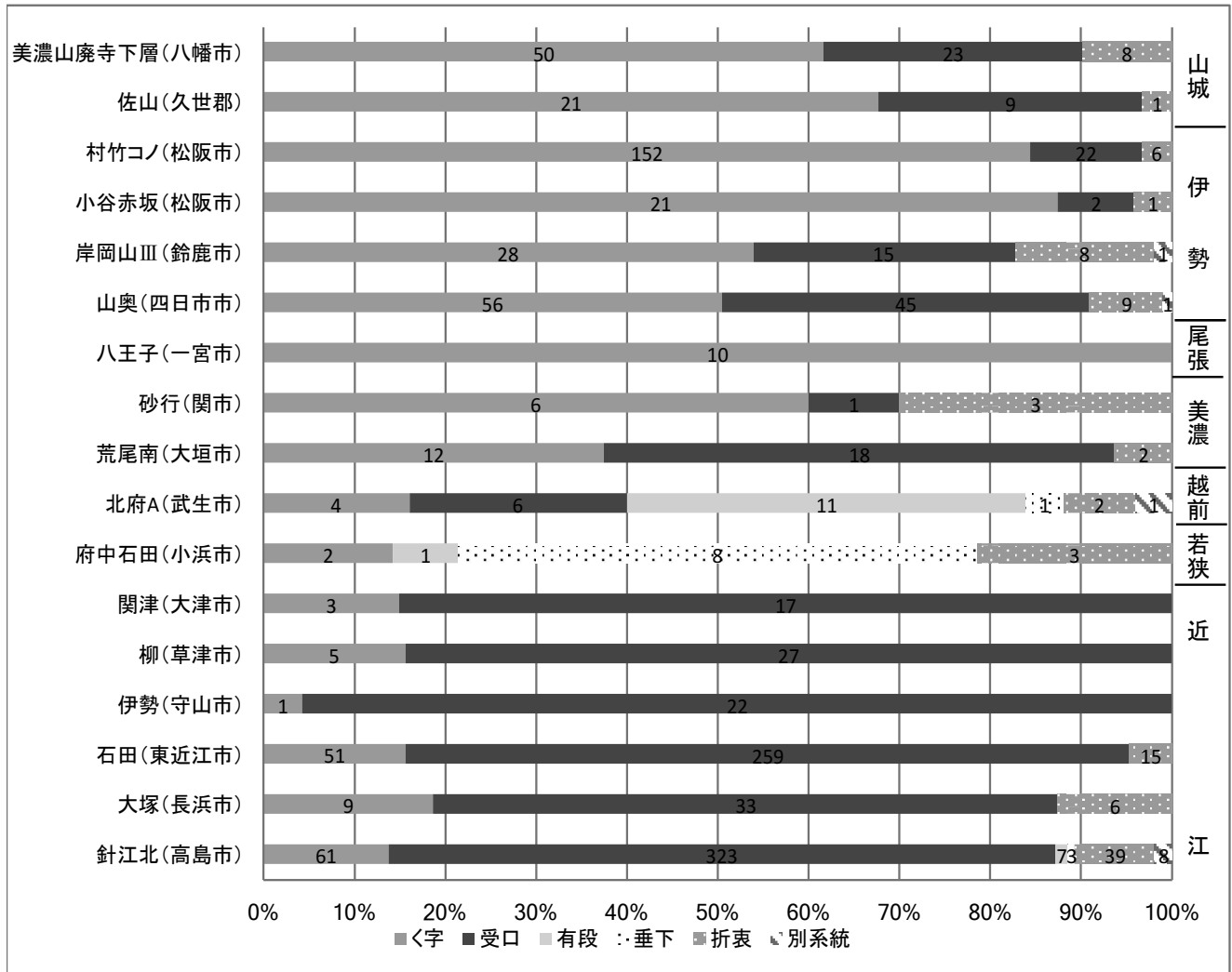


図5 近江地域と周辺の遺跡における甕形土器の口縁形状採用比率

滋賀県以外の場合、最も受口甕の採用比率が高い遺跡は、大垣市荒尾南遺跡の 56%であり、四日市市山奥遺跡が 41%でそれに続く。山奥遺跡と同じ三重県内の遺跡でも、鈴鹿市岸岡山Ⅲ遺跡は 29%、松阪市村竹コノ遺跡は 12%、同市小谷赤坂遺跡 8%で受口甕の採用率は異なる。

山奥遺跡から小谷赤坂遺跡にかけての採用率の変化については、琵琶湖からの距離との相関が推測されるが、琵琶湖から最も南に位置する村竹コノ遺跡の結果をみても、厳密に対応するわけではないことがわかる。

山城地域は、受口甕の採用率が 80%を超える値を示す湖南地域に接する地域であり、距離的には高い受口甕の採用率が予想されたが、久世郡佐山遺跡が 29%、八幡市美濃山廃寺下層遺跡で 28%と、伊勢湾沿岸の岸岡山Ⅲ遺跡と同等の結果であった。

受口甕の採用率と距離の問題に関しては、拠点的な

集落であるか否かなど、遺跡の規模や機能といった要素が大きく影響することが推測されたため、採用率の変化が同心円的でないことが予想されていた。分析結果は具体的な事例を示してその予想を裏付けたように思う。その事実を検証したことに加え、今回の分析によって示された近江地域の東側と西側における受口甕の採用率の差について最後に注目したい。

先に述べたように、山城地域の 2 遺跡では湖南地域からの距離に対して受口甕の採用率が低い。一方で美濃・尾張・伊勢地域では、琵琶湖から遠距離に位置するものの相対的に採用率は高いといえる。このような東西差は、日本海側の 2 遺跡においてさらに明確である。近江地域より西側の小浜市府中石田遺跡で受口甕がみられないのに対して、東側の武生市北府 A 遺跡では 24%を占める。府中石田遺跡の資料数が心許ないだけに今後の検討を要するが、傾向として東西差が存在することを指摘できる。

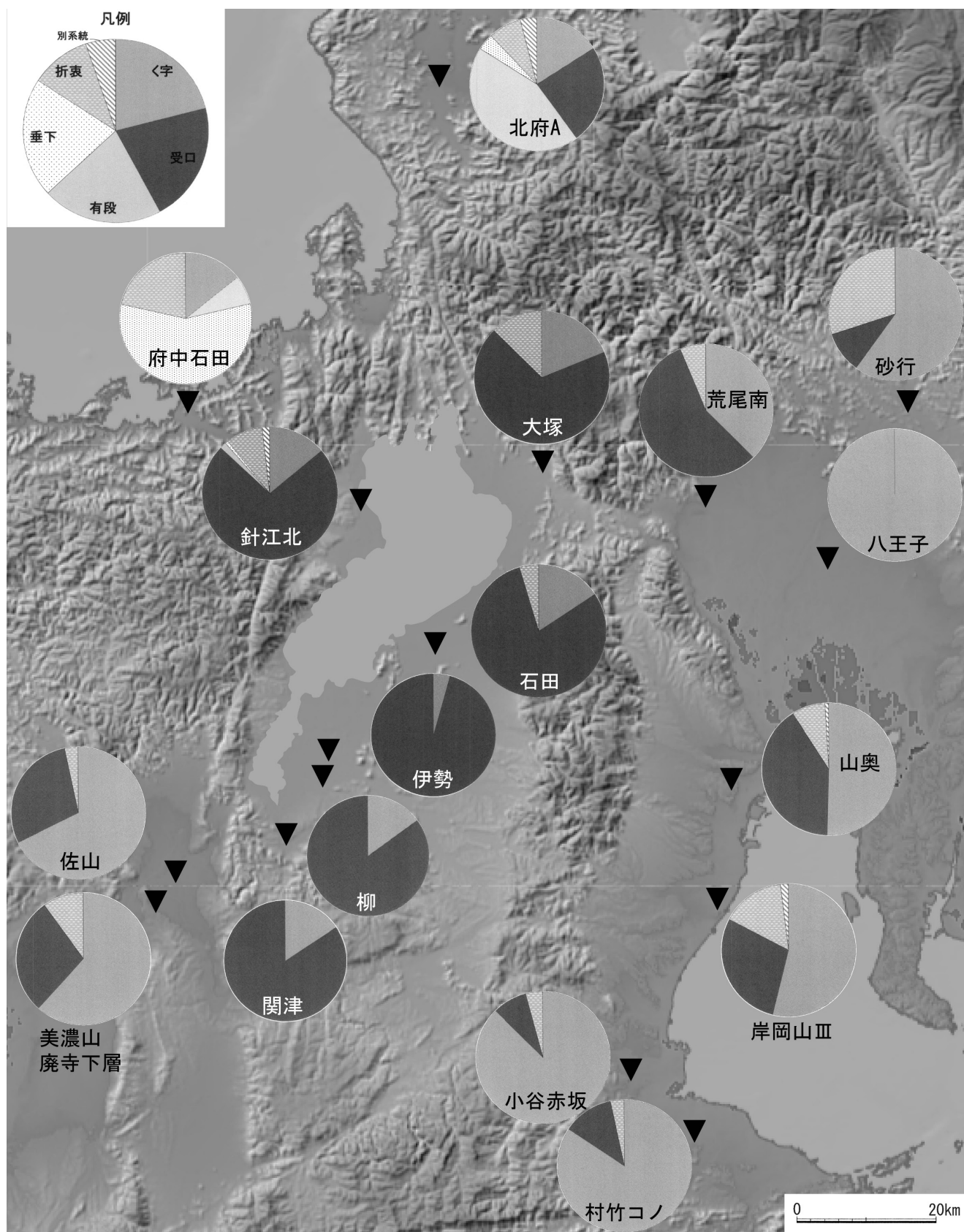


図6 各遺跡の口縁形状採用比率

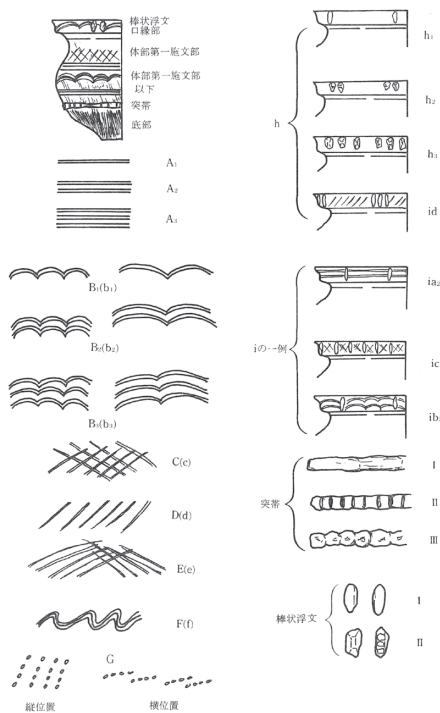


図7 近藤広による施文の分類案

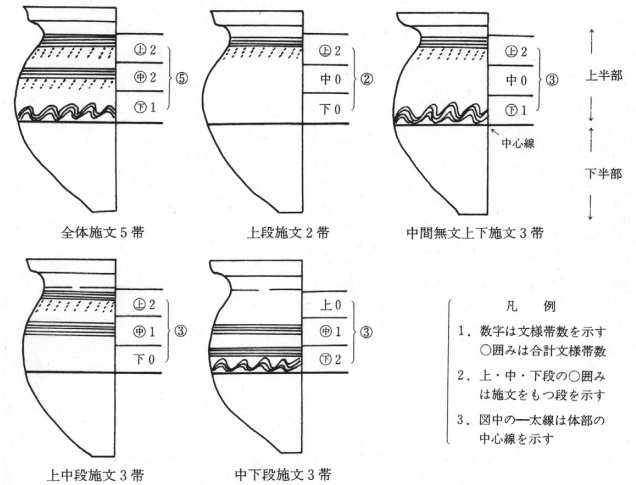


図8 近藤広による施文タイプ分析

4-4. 滋賀県内の受口状口縁甕

前節の分析によって、琵琶湖沿岸一帯で受口状口縁甕が主体的に採用されたことを裏付けた。本節では受口甕の施文の内容や製作技法などに関して考察を加え、前節で示した論をさらに深めたい。

受口状口縁甕の地域性にいち早く着眼した中西常雄は、滋賀県内の各小地域における受口状口縁甕を時期ごとに整理し、甕の形状・施文パターンの比較をおこなった(中西 1985)。その後、この手法をさらに発展させた近藤広により、文様の種類や特徴、組み合わせなどにもとづいて近江地域内部の地域色が抽出された(近藤 1992, 1994, 2001)。

近藤は施文技法の分類をおこない、施文を 11 種に分けている(図 7)。そして施文の組み合わせの検討から、甕頸部直下に直線文・円弧文・斜線文を主体とする「湖南的文様構成」および、湖南の施文に加え斜格子文を採用し、湖南に比べて棒状浮文を施す割合の高い「湖東的文様構成」の抽出をおこなっている(近藤 1992)。さらに、甕の頸部直下から最大径部までを上・中・下段に分け、施文位置の検討から「全体施文タイプ(南部主流)」と「上段施文タイプ(北部主流)」を、くわえて、施文された帯数から「2 帯以下および 3 帯構成のもの(北部主流)」と「4 帯構成以上(南部主流)」を分類の指標とした(近藤 2001)(図 8)。

以上に挙げた両者の分析によって、受口甕の小地域的な特色が抽出可能である点はすでに示唆されてきたといえる。施文のパターンにおいて小地域性を判断する作業の重要性は否定されるべきではない。しかしながら、前節で示したように、琵琶湖沿岸の各地はそのほかの地域と異なり、受口甕を主体的に採用するという明らかに独自の文化を共有していたことが考えられる。

その考察をふまえるならば、本稿では各小地域の独自性を抽出するのではなく、共通性を評価する立場から分析をおこないたい。具体的には、湖南地域の受口甕製作に関する技法的特徴に焦点をあて、その特徴の有無を根拠に各小地域間の交流頻度について解釈を加えることにする。湖南地域を選択した根拠としては、当地域が受口甕の高い採用率を示したことに加え、他の小地域に比べて、甕の製作技法に関する統一性が高く、抽出された特徴の普遍性がある程度保証されるためである。

湖南地域の受口甕の特徴について言及した研究には、上に述べた近藤広の業績(近藤 2001)のほかに伴野幸一による成果(伴野 2006)が知られる。本稿ではこれらを参考にしながら、自身の観察所見にもとづいて、湖南地域における受口甕の特徴をあらためて具体的に定義した。分析の目的上、時期を弥生時代後

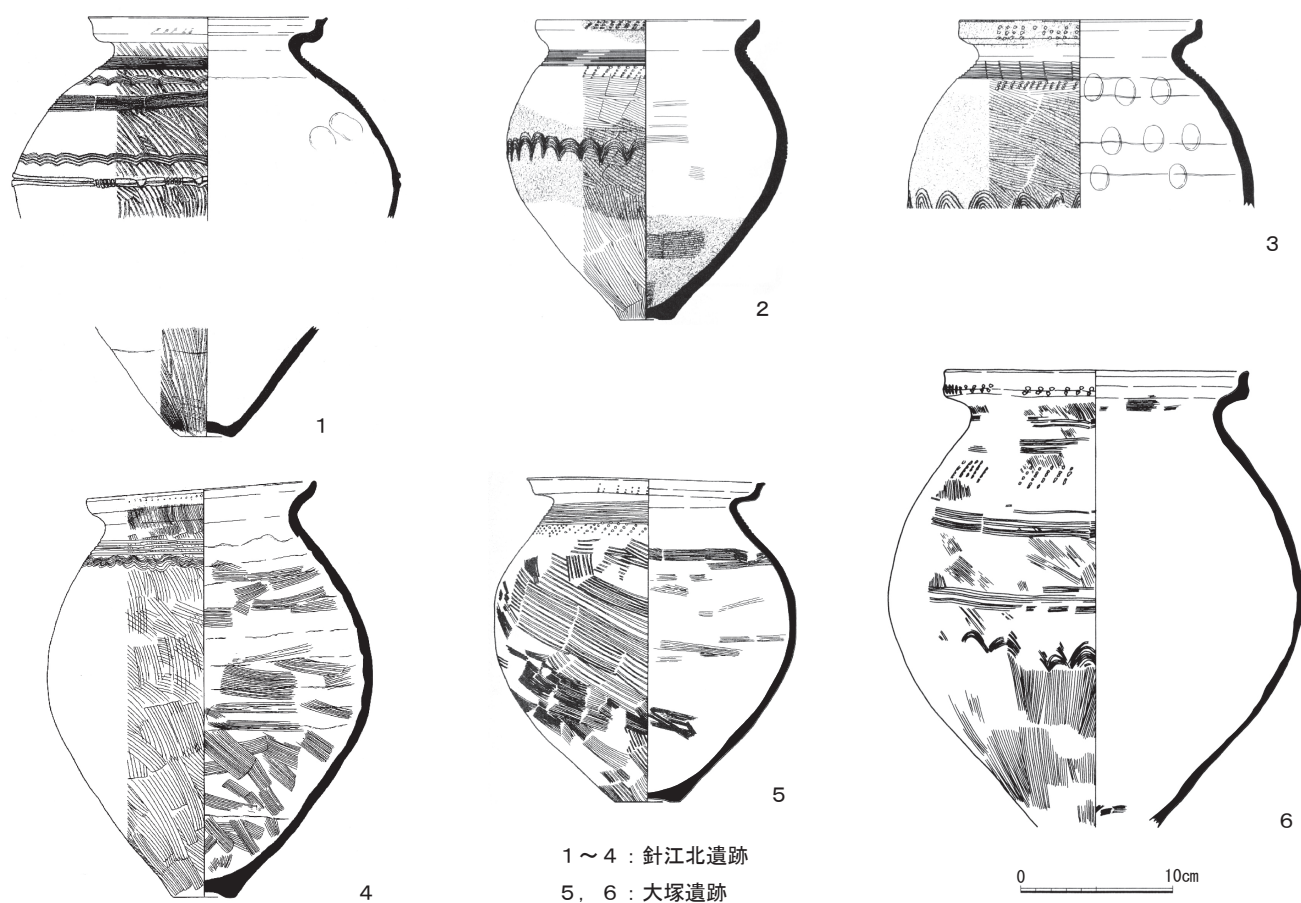


図9 針江北遺跡および大塚遺跡の受口状口縁甕

期後半に限定して以下の5項目を定めた。

湖南地域に代表的な受口状口縁甕の例(図1)は、第一に、受口状口縁の形状に特徴をもつ。口縁部を受口状に屈曲させ、口縁部側辺部を垂直に近づけるとともに口縁下辺部を水平に近づける。第二に、器壁に特徴的な調整を施す。胴部外面下半を縦方向の刷毛目調整を用いて仕上げ、内面は指ナデ調整で仕上げる。特徴の第三として、器壁の薄さが挙げられる。第二に説明した調整技法により、最大径部において器壁が4mm程度以下と薄くなる。第四には、プロポーションの特徴がある。胴部が外側に張り出して最大径が口縁径を大きく上回り、最大径が中軸線の中心からやや上方あたりに位置する。最大径と器高の比が1:1.1~1.2程度、あるいは口径と最大径が1:1.4程度になる¹¹⁾。第五には、口縁部外面から胴部にかけて施される櫛描文や篋描文、胴部下半部の貼付突帯文などといった施文の特徴が存在する。施文に関する湖南地域的な特徴の有無を判断する際には、近藤が設定した「全体施文タイプ(南部主流)」と「4帯構成以上(南部主流)」という視点を本稿でも採用する。

これらの定義にもとづいて、滋賀県内の遺跡出土の事例をみていくことにする。対象は、前節の口縁形状に関する分析で扱った資料と同じである。湖西地域の針江北遺跡では、SH-1出土遺物のなかに湖南地域の特徴をもつものがある(図9-1)。口縁部および大きく張り出す胴部の形状、胴部外面下半の縦方向刷毛目や内面指ナデにみられる調整の様子、胴部下半部の貼付突帯文など各要素を満たしており、そのように判断した。

そのほかの例には、図9-2, 3などに湖南地域の受口甕に通有の、櫛状工具による刺突列点文や波状文といった施文が確認できる。しかしながら、内面調整の方法や器壁の薄さ、施文の特徴のいずれの要素においても湖南地域の特徴を有すると判断するには不十分であった。針江北遺跡に多い受口甕は、図9-4のように受口部の屈曲が明瞭ではなく、口縁下辺部が水平にならずに緩やかに立ち上がっていく特徴がある。この点については、近藤広も北部地域に多い形態として過去に言及している(近藤2001)。

湖北地域の大塚遺跡では、対象とした資料のなか

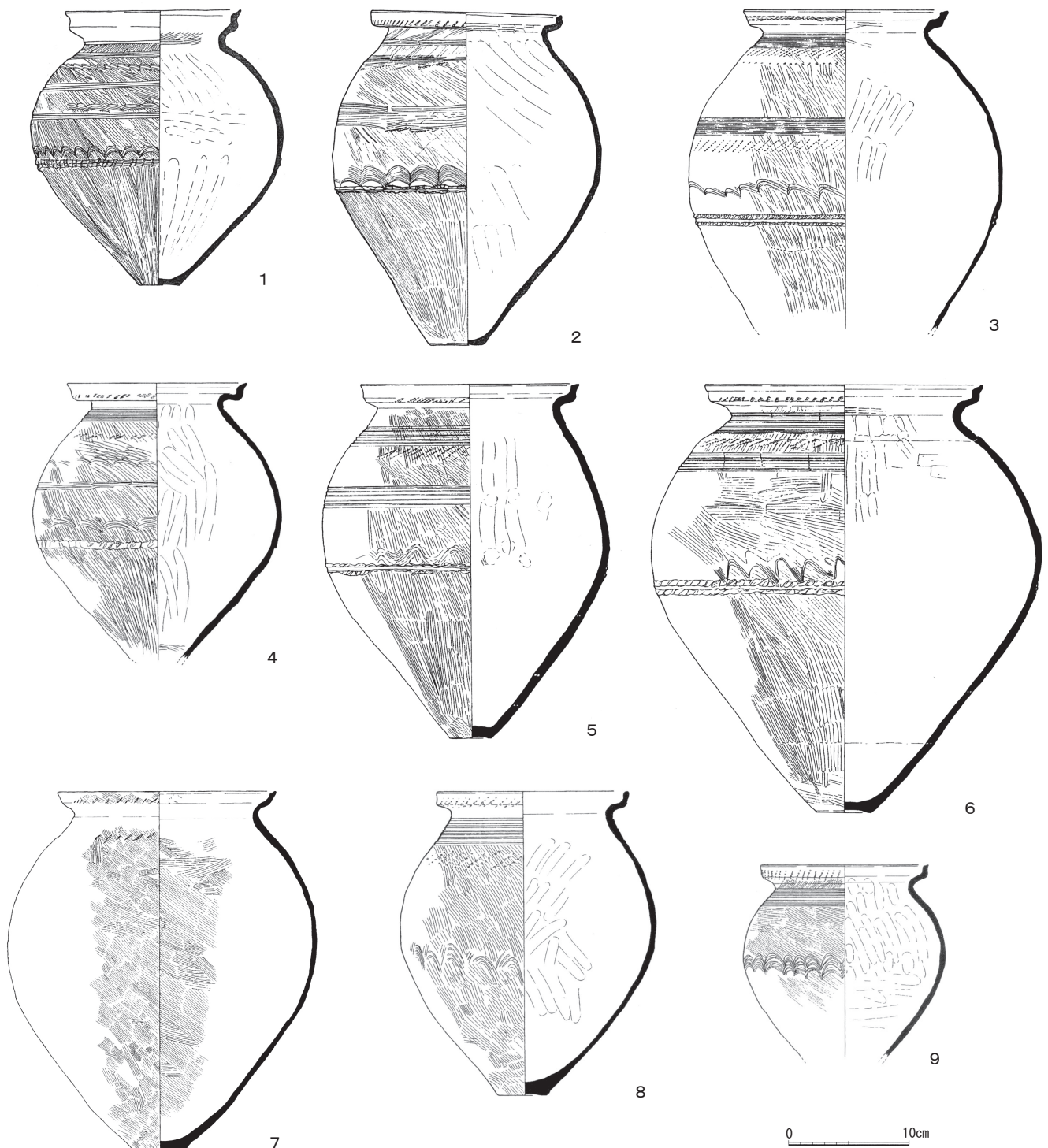


図 10 石田遺跡の受口状口縁甕

に明確な湖南地域の特徴をもつ例は存在しなかった。SB0003 出土遺物のなかに、口縁部の屈曲具合や形状が湖南地域の甕に類似する例があるが(図9-5)、プロポーションや外面刷毛目調整が整っていない点、あるいは内面に刷毛目調整が施される点など、湖南地域の甕の情報を正しく反映していないと判断した。器

壁の厚さに関しても最大径部分で 4.5mm とそれほど薄くはつくられていない。ただし、参考資料として挙げた円形柱穴列状遺構付近から出土した例(図9-6)のように、口縁の形状や内面の調整が近似するうえに器壁も薄く、施文も多帯構成であって沈線文のみならず円弧文を使用している点など、湖南地域の特徴を複

数項目にわたって有する資料がほかに存在することは留意しなくてはならない。

湖東地域の石田遺跡では、先述した2遺跡と比べて、湖南地域の受口甕の特徴を有するものが数多くみられた。いくつか紹介するならばSD-1出土例(図10-1, 2)¹²⁾などは定めた5項目の条件を満たす例である。北環濠3より出土した図10-3も諸条件を満たしているが、胎土の特徴をみると湖南地域からの搬入品とは考えにくい。

そのほかに、施文に関しては「全体施文タイプ」と「4帯構成以上」の条件を満たしているが、内面に刷毛目調整が残る例(図10-4)や、器壁を薄く仕上げられていない例(図10-5, 6)などが存在する。4および5が南環濠から、6が北環濠3から出土している。

石田遺跡の甕は、湖南地域と同じく内面にナデ調整を採用するケースが多いが、刷毛目調整を併せておこなうことも多く、なかには南環濠より出土している図10-7のように、刷毛目調整が主でありながら器壁を薄くつくりあげる例もある。また、北環濠3出土資料にみられる図10-8や9といった、入念なナデ調整によって器壁を薄く仕上げるが、施文が不十分な例が存在する。

このように、石田遺跡の甕には他地域に比べて湖南の特徴が色濃く認められる一方で、その諸特徴の組み合わせについては様々な状況が並存することがよくわかる。したがって、湖南地域の甕製作に関する情報をもつ人びとと日常的に交流がありながら、湖東地域独自の甕製作をおこなっていたことが推察される。

しかし、この考察の前提とした湖南地域の特徴については引き続き検討が必要である。特に施文に関しては、湖南地域においても定義を完全に満たさないものがしばしば確認される。定義をおこなった近藤も、南部地域において主流となる例であると説明していることから、湖南地域の甕にみられる代表的な特徴であることがわかる。それは口縁部の形状や内面調整についても同様である。湖南地域の特徴を正確に把握することで、今回の分析によって導いた湖東地域との交流関係はより積極的に評価できる可能性がある。甕形土器の小地域性に関しては、より客観的な視点からあらためて説明しなくてはならないだろう。

4-5. 小結

前節までの分析にもとづいて、弥生時代後期後半における近江地域の甕形土器に関して、以下の2点を明らかにした。1点目は、口縁の採用比率にみられる地

域的特色である。当該期に琵琶湖沿岸各地では、受口状口縁甕が主体的に使用され、受口甕が主体とはならない周辺地域とは明確な差をもっていた。以前より示唆されていたこの問題について、本稿では様相を数値化したことでより具体的に検証することができた。

2点目は、甕の製作技法にうかがえる各小地域の交流関係である。湖南地域と湖東地域では、施文の構成では差異が存在するものの、外面の刷毛目調整や内面のナデ調整という製作技法に関する点では共通する場合が頻繁にみられ、その結果として重要な特徴である器壁の薄さや胴部が大きく張るプロポーションについても共通がみられた。

このように、甕の成形に影響を与える技法が湖南と湖東地域の間で共有された背景には、土器製作者の交換を生じさせるような恒常的な交流関係の存在が推定される。一方で、湖南地域的な特徴をもつ事例がわずかに1例であった湖西地域や、明確な共通点をもつ例が確認できなかった湖北地域については、そのような湖南地域との交流関係は日常的ではなかったことが考えられる。

ただし、湖西・湖北地域において、湖南地域の甕の影響が確実に存在することを無視することはできない。両地域に少量ながらも存在した、湖南地域の甕の特徴をもった事例やその類似例は、湖南地域で製作された甕を模倣して作られた可能性が高く、その過程には、実物が当地に存在しそれを模倣した場合と湖南地域の甕を実見した人物の情報をもとに模倣した場合という2つの模倣のかたちが想定できる。

この実態を明らかにすることは難しいが、ここで重要な点は、琵琶湖一円に、人・ものが移動した痕跡が甕形土器にあらわれている点である。各小地域の甕形土器の比較から、湖南地域と湖東地域では土器製作技術の共有もみられるのに対して、湖南地域と湖西・湖北地域とはそれぞれ交流関係を認めながらも製作技術の共通性は認められないことを示した。

本章の成果の一つは、弥生時代後期後半の近江地域が、受口甕をきわめて主体的に使用する地域として、他地域と区別できる可能性を示した点である。その成果により、これまで曖昧に使用されていた近江地域という地域区分について、甕形土器のあり方という視点における妥当性を確認した。

本章では、湖南地域の甕にみられる特徴に注目したことで、小地域間の交流関係を理解しようと試みた。本来ならば、一方向的な影響だけでなく双方向的な視点にもとづいて影響関係を把握するべきであった。そのため、各小地域の土器様相の個性を抽出する作業は

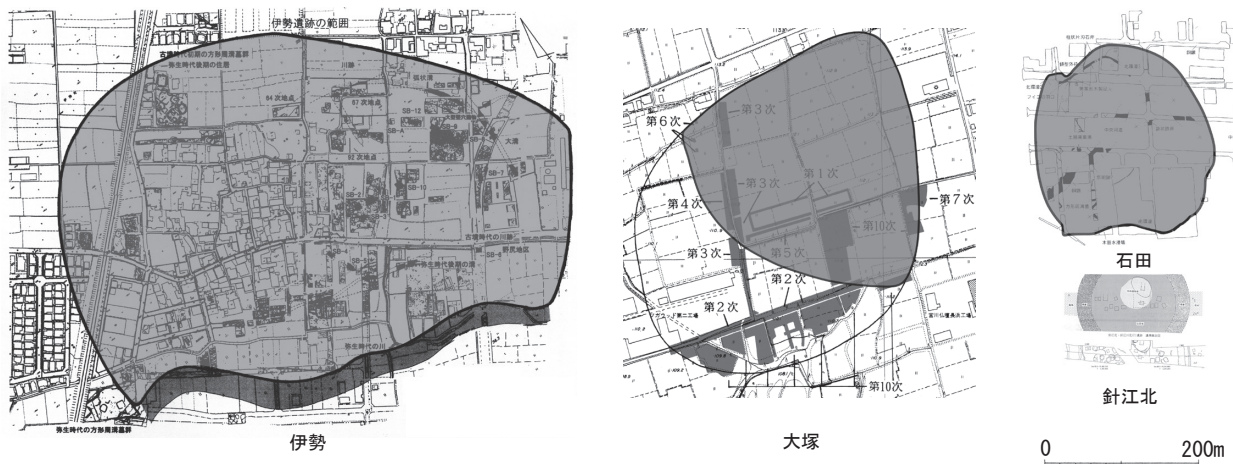


図 11 各集落における居住域の範囲

引き続き取り組まなければならない課題である。

その課題を解消する糸口の一つとしては、甕口縁採用比率分析をさらに深める方法がある。受口状口縁の形態や折衷の内容について類型化を進めることで分類案をより精緻なものとし、より詳細な傾向の判断ができるかもしれない。

もう一つの方法として、甕以外の器種に注目した分析が挙げられるだろう。壺や高杯を対象として採用比率を求めることで、今回の分析では得られなかった各小地域の特色がみえてくる可能性がある。甕形土器は煮沸具として使用されたため、この器種に表れる共通性からは、日常生活、なかでも調理活動において同じ道具を使用する人びとがみえてくる。ほかの器種に関しても、共通性が意味する内容を検討しそれらを重ね合わせることで、甕型土器の使用状況にもとづく地域間関係を正確に評価することができるだろう。

新たな課題はあるが、受口状口縁甕の使用を近江地域の独自性とする従来の仮説を、基礎的な分析によって裏付けた。この問題を解消したことで、琵琶湖を介した交流関係や集落関係へと議論を進めることが可能となるだろう。

5. 集落面積の比較

5-1. 分析の目的と概要

地域間関係といった際に想定される関係性には、友好・敵対関係や同盟関係、序列関係といったものがある。しかしながら、前節までおこなってきた分析のみでは、このような問題に踏み込むことは難しい。本稿の目的である小地域間の関係性をより詳細に理解するために、本章では集落の規模に着目する。具体的には、

前節でおこなった甕の採用比率分析の結果、強い共通性を見出した滋賀県内の集落の面積を比較し、その関係性を考察する。

集落面積の計測による比較研究では、森井貞雄による成果が代表例としてあげられる。森井は瀬田佳男の研究を受けて、範囲が十分に推定できる近畿地方の環濠集落 57 例をデジタルプランニメーターで計測し、5つのランクを設定した(森井 2001)。さらに森井は、分析結果を踏まえて環濠集落の時期的および地域的な動向を示し、弥生時代を通じた環濠集落の盛衰を論じている。

桑原久男は、酒井龍一による「畿内弥生社会セトルメントシステムモデル」の成立過程を繙くとともに、具体的なデータにもとづいた裏付けが不十分であることを指摘し、森井の成果を例として挙げながら集落面積の蓄積や、その先に見据えたより有効なセトルメントモデルを構築する必要性を説いた(桑原 2012a)。また、自らも奈良盆地の拠点集落を対象として、分析方法の説明も交えて事例研究を進めている(桑原 2012b)。

本稿で筆者は、森井がおこなったデジタルプランニメーターを用いる方法を採用した。計測範囲に関しても森井の方法に準拠して「環濠部分(環濠帯)を除いた正味の居住空間」(森井 2001: 139)を測定することとした。この範囲は、桑原による方法の整理における「C. 生活に関わる遺構・遺物の集中する(複数の)居住域の面積」(桑原 2012b: 19)にあたる。それぞれの遺跡における測定範囲の認定は、各調査報告書をもとにおこなった。

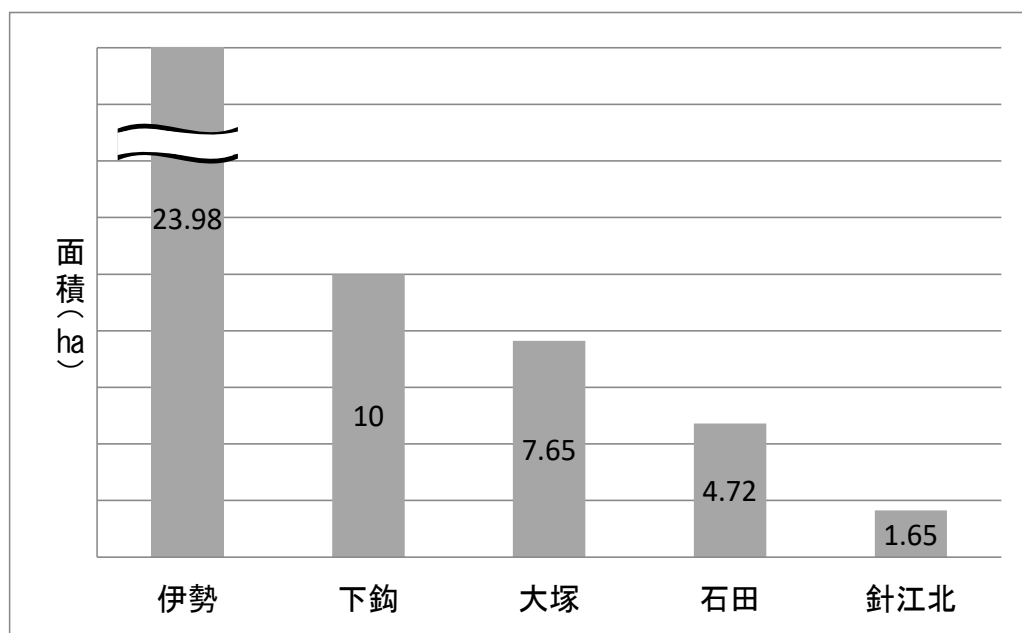


図 12 各集落の面積

5-2. 分析結果および考察

本稿で対象とした集落は、第四章で扱った高島市針江北遺跡、長浜市大塚遺跡、東近江市石田遺跡、守山市伊勢遺跡に、栗東市下鈎遺跡を加えた 5 例である。下鈎遺跡については甕形土器による分析を実施していないが、従来から弥生時代の近江地域における拠点的な集落として、遺構・遺物の両面から注目されており、検討対象として加えるべきであると判断した。ただし、発掘調査によって検出された環濠による明確な居住域の範囲は明らかでないため¹³⁾、下鈎遺跡の面積は近藤広による推定範囲（近藤・松村 2011）を採用した参考値を示している。本来ならば、弥生時代後期後半の集落のみを対象とするのではなく、上記の集落が機能した前後の時期までを含めて検討をおこない、変遷過程などを踏まえた議論をおこなうことが望ましいが、本稿では目的に沿った対象に限定した。

計測の結果、集落の規模に明瞭な差があることがわかる（図 11, 12）。特に、伊勢遺跡がほかの例と比べて圧倒的に大きな面積をもつことが重要といえる。集落面積からも、従来強調されてきた伊勢遺跡の特殊性がうかがえる結果となった。事例数が不十分なため筆者があらためて分類することはしないが、森井の分類に従えば、針江北遺跡が第 1 ランク：0.1 ～ 2.0ha にあたり、大塚遺跡と石田遺跡が第 3 ランク：4.0 ～ 8.0ha、下鈎遺跡が第 4 ランク：8.0ha ～ 16.0 となり、第 5 ランク：16.0 ～ 32.0ha として伊勢遺跡

が存在する。

集落の基礎的な要素である面積からみた場合、弥生時代後期後半の近江地域には伊勢遺跡を頂点として明確な規模の差異が存在したことを確認した。事例の不足や、環濠をもたない小規模な集落をどのように扱うかという問題は引き続き考えていかなくてはならないが、面積規模の類型数のみでいえば、Flannery が初期国家段階にあたると指摘した 4 階層以上の集落が見出せる状況に一致しており（Flannery 1998）、同様な集落階層性が存在した可能性がある。この推定に関しては、次章の検討や各集落の内容も含めてあらためて結論でふれることにする。本稿では、これまで取り組まれてこなかった集落の比較分析を、具体的な数値にもとづいておこなった。今後は複数地域で検討を進め、近江地域における結果の普遍性を確認する必要がある。

6. 独立棟持柱建物の状況

6-1. 各集落における独立棟持柱建物のあり方

独立棟持柱建物が近江地域の弥生時代後期を特徴づける考古事象の一つであることは既に述べたとおりである。本章では集落間関係に対する議論をさらに深めるため、このような特殊建物遺構にみられる関係性について論じてみたい。

本稿で対象とした集落遺跡および、近江地域における弥生時代後期後半の遺跡から発見されてきた独立棟

表 2 滋賀県内の弥生時代後期の独立棟持柱建物一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構名	事例番号	時期	規模
1	針江北	高島市新旭町	SB12	1	後期後半	3 × 1 間 (4.6 × 3.4m : 15.64㎡)
			SB14	2		3 × 1 間 (4.5 × 4.4m : 19.8㎡)
2	大塚	長浜市 西上坂町・新栄町		3	後期後半～ 庄内式併行期	布掘り桁 × 1 間 (5.2 × 4.2m : 22㎡)
3	石田	東近江市山路町	SB-104	4	後期後半	3 × 2 間 (4.2 × 3.2m : 13.44㎡)
			11-1 区 SB01	5		2 × 1 間 (3.2 × 3.2m : 10.24㎡)
4	伊勢	守山市伊勢町	SB (4)	6	後期後半	2 × 1 間 (3.2 × 3.6m : 約 11㎡)
			SB3	7		3 × 1 間 (7.3 × 6.1m : 45㎡)
			SB4	8		5 × 1 間 (9.0 × 4.6m : 41.4㎡)
			SB5	9		5 × 1 間 (8.6 × 4.6m : 39.56㎡)
			SB7	10		5 × 1 間 (8.7 × 5.1m : 44.37㎡)
			SB8	11		5 × 1 間 (9.0 × 4.5m : 40.5㎡)
			SB9	12		5 × 1 間 (9.0 × 4.5m : 40.5㎡)
			SB12	13		6 × 1 間 (10 × 4.5m : 約 52.5㎡)
			SB-A	14		2 間以上 × 1 間 (2.4m 以上 × 3.0m : 7㎡以上)
5	十里	栗東市十里	C 地区 掘立柱建物 6	15	後期後半～ 庄内式併行期	3 × 1 間 (6.0 × 5.0m : 30.0㎡)
			D 地区 掘立柱建物 4	16		2 × 1 間 (3.6 × 3.4m : 12.24㎡)
6	下鈎	栗東市下鈎・荻原	1992SB1	17	後期後半	5 × 2 間 (8.8 × 5.4m : 48㎡)
			1997SB1	18		4 × 2 間 (7.6 × 5.05m 以上 : 40㎡)
7	中兵庫	草津市 北山田町・木川町	第 1 号 掘立柱建物	19	後期後半	2 × 1 間 (4 × 3.6m : 14.58㎡)

持柱建物遺構は、表のとおりである（表 2）。以下に各事例のあり方を論じる。規模については表を参照していただきたい。

（1）針江北遺跡（図 13）

幅約 20m の環濠に囲まれた、弥生時代後期後半を中心に機能した環濠集落である。直径約 150m の集落中央部には、掘立柱建物で構成される空間が存在し、独立棟持柱建物 SB12 および SB14 はそのうちの 2 棟である。中央部の一角には、矢板による円形の区画施設が存在し、その内部には掘立柱建物が検出されている（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 1992）。

（2）大塚遺跡

発掘調査概報によって状況を知ることができる。独立棟持柱建物は集落内の遺構が集中する範囲に存在し、布掘り掘方をもつ例である。竪穴建物などからの

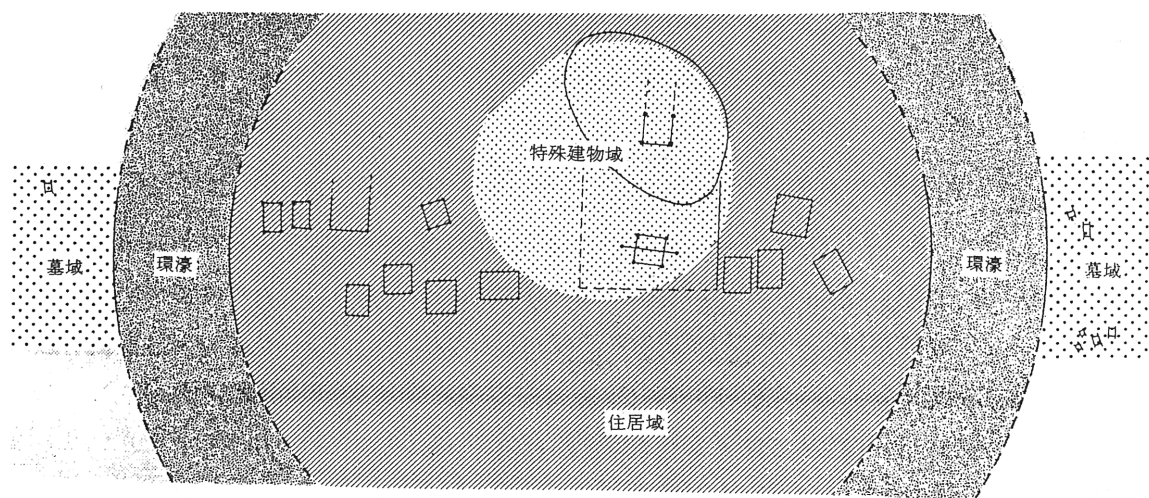
出土土器から、集落が営まれた時期の中心は弥生時代後期後半と考えられている（丸山 1996）。

（3）石田遺跡（図 14）

弥生時代後期後半に活動の中心を置く環濠集落である。SB-104 は北環濠（SD- 1）と SD- 3 に区画された北側外郭に存在し、SD- 3 には柵列が付随する。SD- 3 の出入り口が北環濠の逆側に設置されているという理由にもとづいて、SD- 3 に囲まれた SB-104 を含む施設は、首長の館あるいは祭祀に関する施設と考えられている（西・杉浦 2003）。11- 1 区 SB01 は、北環濠 3 の内部に位置する。周辺には約 20m 離れて掘立柱建物が複数棟確認されている（杉浦他 2005）。

（4）伊勢遺跡（図 15）

弥生時代後期後半に営まれた南北 450m、東西 700m におよぶ大規模な集落である。伴野幸一によれば、大きく 4 時期に分けて建物がつくられたとされる。



針江北・針江川北(I)遺跡 遺構概念図

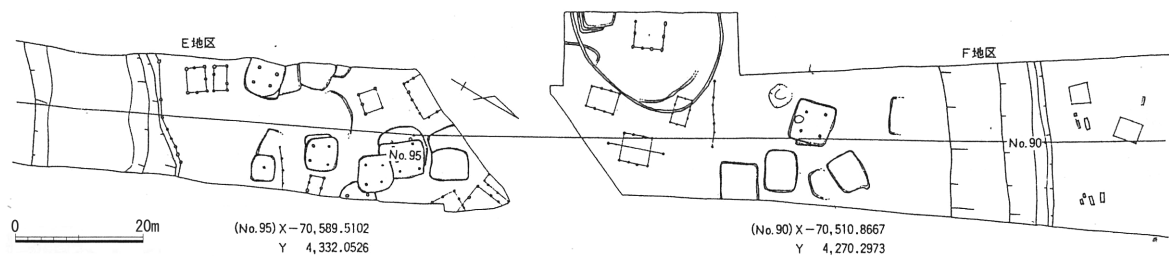


図 13 針江北遺跡の遺構概念図および遺構分布図

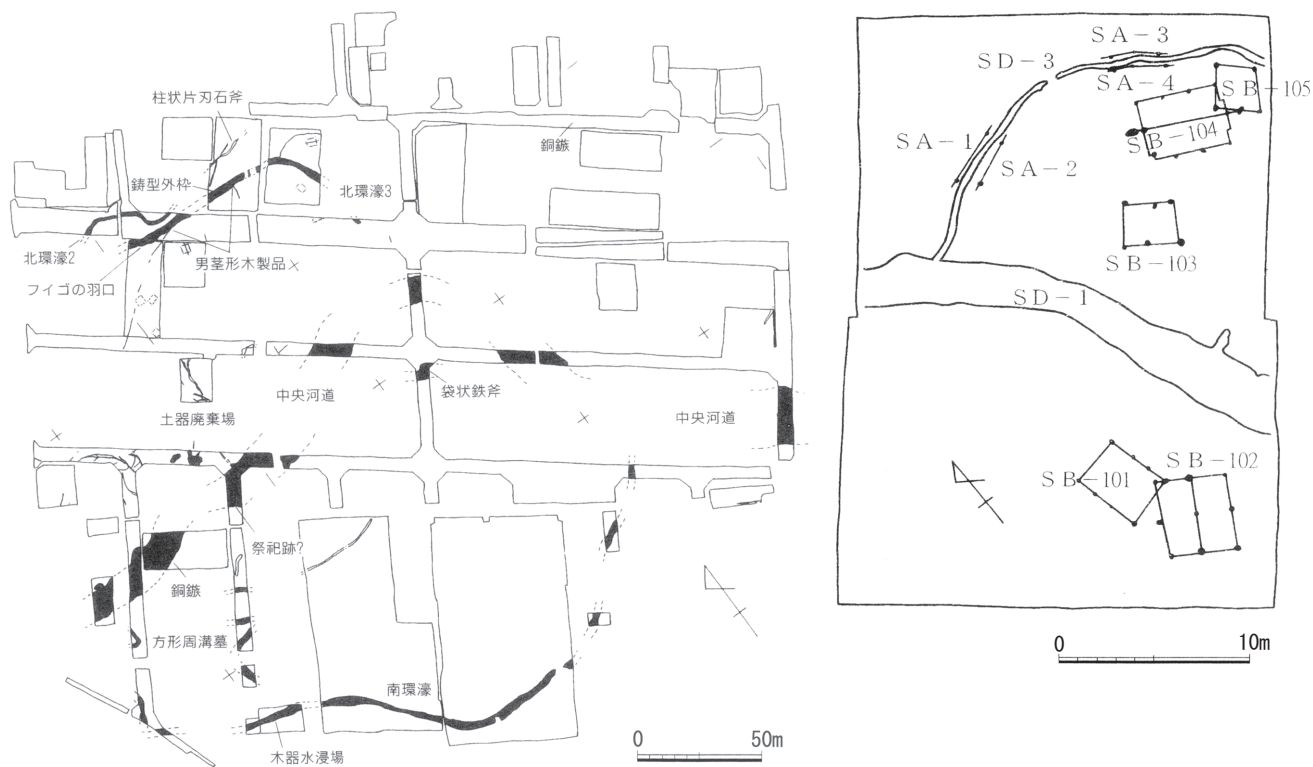


図 14 石田遺跡の遺構分布図および独立棟持柱建物のあり方

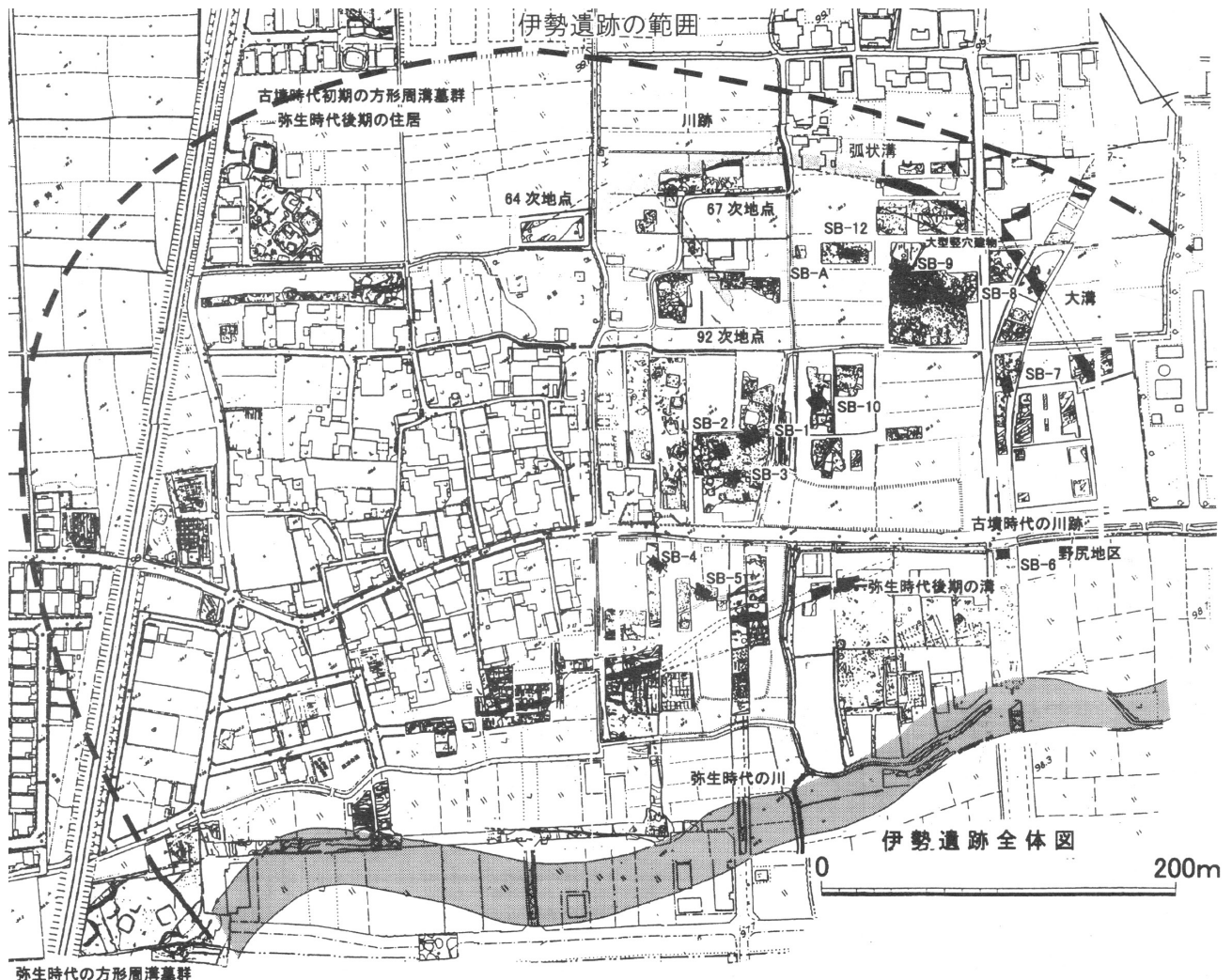


図 15 伊勢遺跡集落概略図

1 期は、SB- 3、SB- (4) がほかの掘立柱建物 1 棟と共に、中心部に成立する。2 期では、中心部に 2 棟の掘立柱建物が並列して配置され、二重の柵により区画される。独立棟持柱建物は SB 7 が存在する。3 期は SB 8、SB 9 が建てられる。4 期は、SB 5 および SB 4 が存在する。そのほかにも SB-12 と SB-A は 3 期または 4 期に成立したと考えられている。SB 7、SB 4、SB 5、SB 8、SB 9、SB-12、SB-A は環状配列を構成することが想定されている。そのほかの遺構として、1 期に成立したと考えられる一辺 13.6m の大型竪穴建物や、2 期に成立したと考えられる楼観状の上部構造が推定される大型掘立柱建物が周辺に存在する。大型竪穴建物は屋内に棟持柱をもつと考えられ、壁際には焼成された壁材が置かれるほか、床面は貼床を施した後に精良な粘土を張り、上面から焼成を加えて形成されていると報告されている。また特筆すべき出土遺物として、SB 8 の付近から破碎鏡および勾玉や

管玉などの埋納が指摘されている（伴野幸一 2003, 2009）。

（5）下鈎遺跡（図 16, 17）

弥生時代中期後半から営まれる集落遺跡であり、後期後半は河川および溝によって区画された、特殊な空間と考えられる範囲をもつ。独立棟持柱建物その範囲内に存在する。布掘りの掘り方をもつ 1992SB 1 を中心とする北西側地区と、露台式施設をもつ 1997SB 1 を中心とする南東側地区に分かれると推定され、範囲内中央付近には、門状施設を検出する河川側へ突出した区域が存在し、周辺には突出部と同一軸をもつ柵列が認められる。南東側地区は、少なくとも 2 時期の変遷が考えられ、平地式建物と推定される建物遺構がまず出現し、その後、堀もしくは柵状の施設に区画された 1997SB 1 がつくられる。その西側には建て替えが認められる小型の建物が共存する。また、同時期

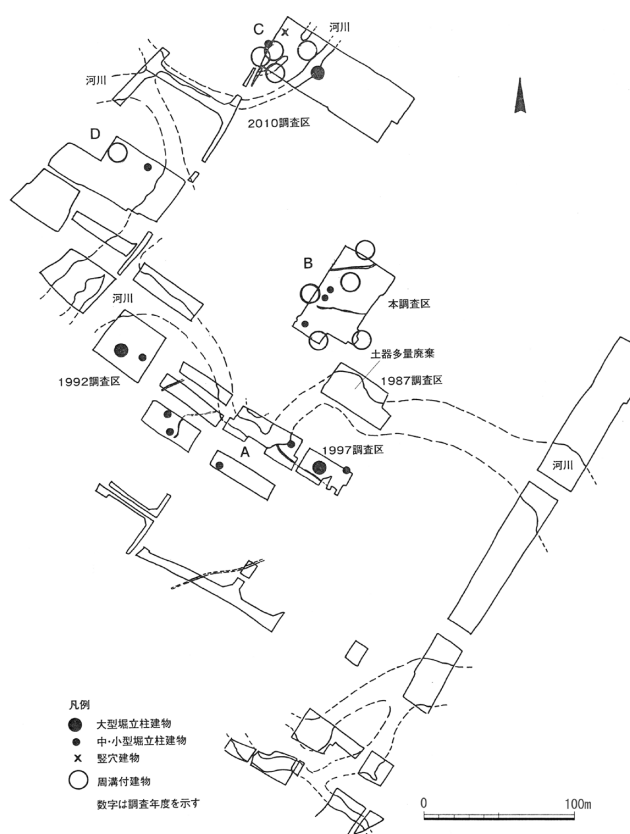


図 16 下鉤遺跡集落概略図

の遺構からは搬入品を含む大量の土器のほか、青銅器や青銅器生産に関連する遺物が報告されている（近藤 2010）。

ここまで独立棟持柱建物の各集落におけるあり方をみてきたが、調査範囲の制限等の理由もあり、この種の建物の配置や付属施設に関して、厳密な規則を抽出することは困難である。しかし、全容はわからずとも、溝や柵列などによって区画されて存在する例が多いことは判断できる。筆者は、弥生時代後期以降では竪穴住居から隔てられて存在する事例が増加することを指摘したが（山下 2015）、本稿では新しく確認した例も含めてその傾向を追認することができた。ただし、各事例は区画施設の範囲や施設内のほかの建物の内容などに関して多様な状況を呈しており、一様な理解はできない。弥生時代後期の事例の大半が集中する近江地域を対象にこの種の建物の変遷を検討することは、独立棟持柱建物の機能を考えるうえでも重要な課題である。

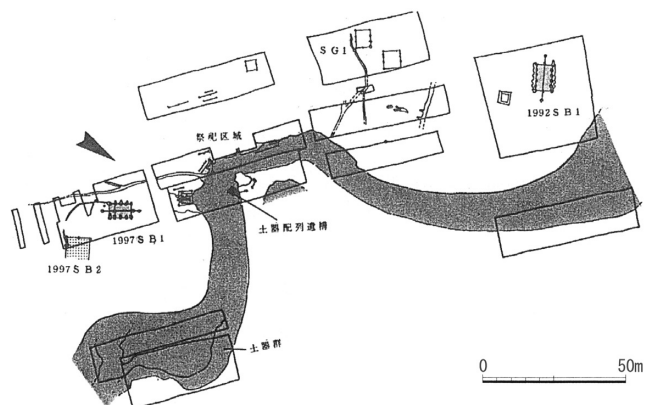


図 17 下鉤遺跡における独立棟持柱建物のあり方

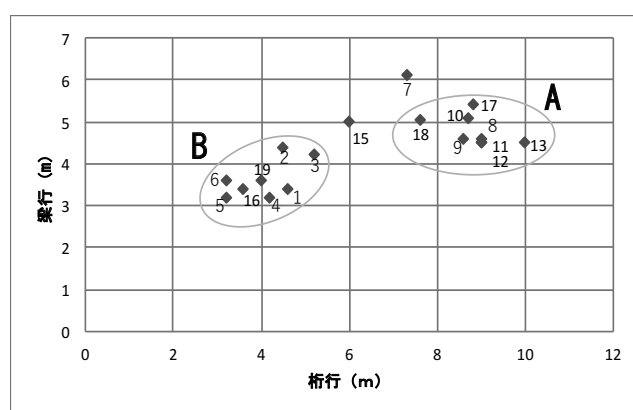


図 18 独立棟持柱建物の梁行・桁行

6-2. 独立棟持柱建物の規模

本節では各事例の規模の比較をおこなう（図 18）。近年の調査で確認された事例を加えているが、この検討方法は一般的であり、滋賀県内の独立棟持柱建物は桁行および梁行の規模から 2 グループに分かれることが言及されている（近藤 2006b）。あらためて事例を加えた結果を吟味してみると、二つのまとまりの妥当性が再認識されるだろう。

グループ A に含まれる比較的に大きな規模をもつ建物は、すべてが湖南地域の伊勢遺跡・下鉤遺跡の事例であることに対して、グループ B はそのほかの遺跡を含めた多数で構成される。注目すべき点は、同じ弥生時代後期に存在したこの種の建物の規模に関して、特定の遺跡とそれ以外の遺跡で明確な差が生じていることである。近藤氏は、前者を「大きい広い範囲での势力的な建物」、後者を「流域単位やその地域の首長、集団の施設」と考えている（近藤 2006b）。また、グループ A の遺跡が、前節の面積比較分析における上位 2 遺跡であることも重要な意義をもつと推測される。

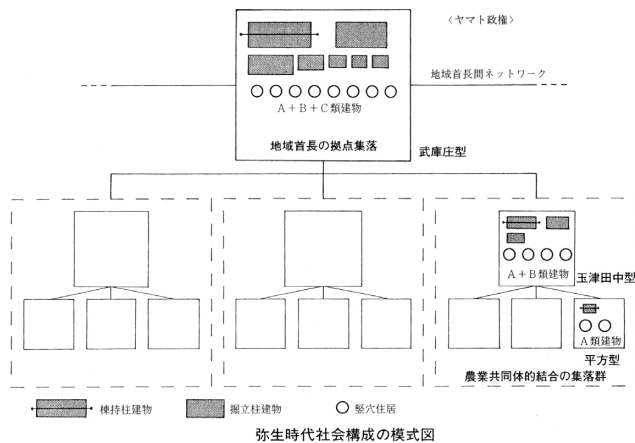


図 19 岸本道昭による弥生時代社会構成モデル

この現象については、岸本道昭が掘立柱建物に着眼した各集落間の階層性モデルを提示している（岸本1998）（図19）。岸本の対象とした事例は時期を限定したものではないが、このモデルのような関係性を検証できるとすれば、近江地域の弥生時代後期が対象としてふさわしいかもしれない。今後、集落の構成要素等の検討を深めることで、近江地域をモデルとする弥生時代後期社会像を模索する必要がある。

以上のように、前章でみてきた集落間の階層性の問題について、独立棟持柱建物からも補強することが可能であった。限られた地域内の集落において同じ構造の特殊建物をもつことや、建物の規模が集落規模に対応するといった状況について、終章では今一步考察を深めたい。

7. 弥生時代後期における近江地域の集落関係

各章の結果を総合すると、現在の滋賀県にある集落遺跡では、まず、受口状口縁甕を主体的に使用するという大きな特徴がみられる。この結果から集落に暮らす人びとの生活様式の共有がうかがえるとともに、琵琶湖を介した人やものの交流が恒常的であったことを、後の議論の前提として立証した。

次に、面積の比較を通じて、日常的な交流関係で結びついた集落間に規模の大小が存在することを数値を示して明らかにした。伊勢遺跡の突出性が再確認され、規模によっていくつかの階層に分かれる可能性も指摘できるが、面積に関する分析のみでは検討は不十分といえる。

ここで論じようとした弥生集落の階層性の問題は、過去にもさまざまな角度から検証されてきたテーマで

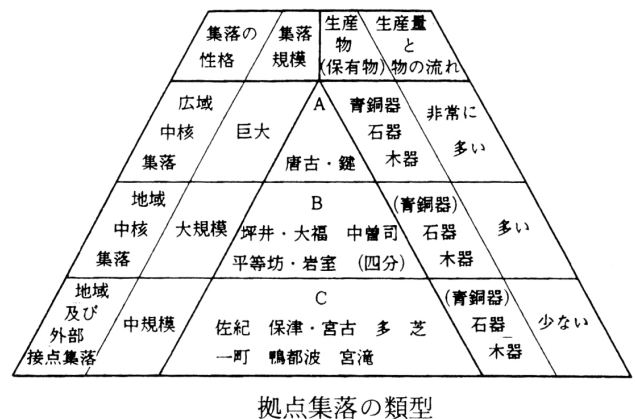


図 20 藤田三郎による拠点集落の類型モデル

ある。前章でも紹介した岸本道昭や藤田三郎は、拠点集落がもつ大型建物や青銅器といった構成要素を重視し弥生時代の集落階層を復元している（岸本 1998, 藤田 1999）（図 19, 20）。これらの論考でも、集落間に規模の差異が存在することを指摘するが、集落規模は抽象的な基準によって表現され、面積の具体的な比較はおこなっていない。本稿では面積を分析の中心としたが、対象とした集落について、上の両者が注目した構成要素の有無を検証してみると、その内容についても差異が確認できる。

最も面積の大きい伊勢遺跡では先述のように、集落を構成する建物にほかの遺跡とは異なる多くの特徴がある。本稿の分析でグループ A とした複数の独立棟持柱建物をはじめとして、二重の柵によって区画される中心部、大型竪穴建物や楼観状の構造が推定される大型掘立柱建物など、特異な遺構が数多くみられる。

第2ランクの相当する下鈎遺跡と第3ランクの石田遺跡では、青銅製品や青銅器生産に関係する遺物の出土が興味深い。下鈎遺跡ではこれまでに銅釧や20点以上の銅鏃が出土している(佐伯2001, 近藤2006a)ほか、土製鋳型外枠や銅残滓の出土が報告されている(近藤2006a)。石田遺跡でも、3点の銅鏃のほかに土製鋳型外枠や残滓、先端部がL字状に曲がる送風管が出土し(杉浦他2005)、青銅器生産がおこなわれていたことが確実であると考えられる。その一方で、最も集落面積が小さい針江北遺跡では、青銅器生産に関連する遺物や遺構はみつかっていない。

以上に示した構成要素の差にくわえ、前章の独立棟持柱建物の規模に関する分析結果を考慮すると、面積にあらわれた差を、集落階層の差として評価すること

も可能ではないだろうか。

従前の弥生集落研究で重視されてきたことは、膨大な調査に裏付けされた集落の様相であり、必然的に調査が十分に蓄積された遺跡や地域が対象とされてきた。それゆえ、基礎的な集落関係を反映する規模や面積といった要素の差異は自明のものと理解され、あえて積極的な議論がおこなわれなかったのではないだろうか。

そのような状況のなかで、近江地域の弥生後期社会をモデルケースとして、面積から集落関係の復元を試みたことは一定の成果といえる。今後は、他地域における弥生後期の集落遺跡も含めて分析事例を増やし、今回の結果を相対的に評価する必要がある。

伊勢遺跡およびその一つ下位のランクに位置する下鈎遺跡が湖南地域に存在することや、湖南以外の地域における拠点的な集落と理解されてきた例が第3ランク以下である事実を踏まえると、湖南地域とそれ以外の地域には厳然とした差が存在したことは疑いない。しかしながら、その差を根拠として湖南以外の小地域の役割が過小評価されるべきでは決していない。

土器の分析結果から示した交流関係からもうかがえるように、琵琶湖一円に存在した各集落が一体となって機能したことを適切に評価すべきである。弥生時代後期における日本海側と太平洋側を結ぶ文物の交流の一部は、湖南地域を中心としたこの機構が担ったと考えられ、その役割は周辺各地に大きな影響を与えただろう。

ここで注意すべきことは、甕形土器によって確認した交流の痕跡を、ほかの遺物に直接当てはめるわけにはいかないという点である。日用品である土器と、たとえば威信財としての機能を担う金属器等では、交換をおこなう主体が根本的に異なったであろう。最後に、独立棟持柱建物を対象とした分析に依拠しながら、その問題について考えてみたい。

弥生時代の独立棟持柱建物が共同体全体の管理から首長層の台頭とともに特定集団による独占的管理へ移っていったとする論（設楽 2009）に対して、かつて筆者は、弥生時代と古墳時代の独立棟持柱建物を実際に比較することで妥当性を追認している（山下 2015）。

第六章でみてきたように、近江地域における弥生時代後期の独立棟持柱建物は、古墳時代の事例ほど顕著ではないにせよ、溝や柵列によって区画されるあり方を示すことから、その管理の主体が首長層であったと考えることが可能であろう。その仮説が許されるのであれば、この種の建物を有する集落間では首長層の結

びつきも緊密であったと推測できないだろうか。

Flannely は集落階層性を説明する際に、集落内施設の種類と有無についてもふれている。注目すべきは、上位階層集落にある建物を小型化したものが下位階層集落に築かれるという指摘である（Flannely 1998）。このことは第六章で論じた内容とも合致している。したがって、本稿で扱った集落同士に、面積の大小にとどまらない強い結びつきを推定することはこの点からも妥当といえるだろう。

Flannely が例として挙げている施設は政治施設や宗教施設とされ、建物の機能推定が難しい掘立柱建物遺構にその論を適用することに対して異論はあるかもしれないが、独立棟持柱建物の性格上、決して間違った理解ではないと筆者は考える。

以上のように、甕形土器、集落面積、独立棟持柱建物を対象としてそれぞれ基礎的な分析を重ねてきたことで、甕形土器に代表される日常的なもののほか、首長間で取引されるような品々についても、琵琶湖を介した流通の妥当性を肯定した¹⁴⁾。本稿において基礎的な分析に執着してきたことも、このことを着実に論証するためである。

受口状口縁甕や独立棟持柱建物の一体性をみると、重要地域に囲まれながらも、なお強い独自性を保つ近江地域のようなすがとらえられる。しかし、たびたび話題にのぼる近江地域における弥生時代後期の銅鐸生産の可能性を考慮してみても、他地域から孤立していたと理解することはできないだろう。この独自性の要因を理論的に説明することは現状では難しいが、琵琶湖一円の集落が一体となってこの独自性を維持していたこと、そしてこの結束が当時の情報交流をより円滑にしたであろう可能性を強調したい。

8. 課題と展望

本稿に残された大きな課題の一つは、分析結果から導き出した琵琶湖一円の交流関係が担った役割や、それによって生じた影響をより具体化していくことである。実際の作業としては、琵琶湖を介して広がる文物の存在を提示していくことが重要になる。その行程を経ることではじめて、本稿で基礎的な分析を通じて示した交流関係を、地域論的な評価でとどめずに、列島規模での社会変化の一要因として昇華させることが可能になっていく。

また、論中で述べたように、本稿で達成できなかった甕形土器以外の器種に焦点をあてた分析も必要になるだろう。甕の分析を素地として他器種に注目することで、今回みられたような甕の共通性がなぜ生じるの

かといった問題へ迫ることも可能になるはずであり、そのことは甕の地域性が顕出すると理解される弥生時代後期から古墳時代のはじまりという時代について考察を深める手がかりを得られるかもしれない。本稿の成果は、以上の二つをはじめとした数々の検討の前提としての役割が大きく、今後の分析をおこなうことでその意義を十分に確認できると理解している。

謝辞

本稿は、2015 年度に東京大学大学院人文社会系研究科へ提出した修士論文を基礎として加筆修正をおこなったものである。執筆にあたり、指導教官の設楽博己先生をはじめ、大貫静夫先生、佐藤宏之先生ほか、東京大学考古学研究室の先生方より多大なる御指導を賜った。また、資料調査に際しては、守山市埋蔵文化財センターや東近江市埋蔵文化財センター、高島市教育委員会、そして滋賀県埋蔵文化財センターの皆様へ御高配を賜った。瀬口眞司様より発表の機会をいただいた近江貝塚研究会では、滋賀県を中心に活躍する研究者の方々から御意見をいただく貴重な経験を積むことができた。すべての方々のお名前を挙げることは叶わないが、御指導くださった皆様に深く感謝し、御礼申し上げる。

〔註〕

- 1) 本稿では現在の滋賀県にほぼ該当する範囲を「近江地域」として使用する。
- 2) 森岡秀人は湖南だけでなく湖東地域も含めた地域の担った役割の重要性を高く評価しており（森岡 2015）、琵琶湖南岸の一部地域のみを扱う傾向は徐々に減ってきてはいるが、依然として南半地域を対象とした分析に止まっている現状がある（戸塚 2016）。
- 3) 繰り返し使用することによる煩雑さを避けるため、本稿では慣例に則り、甕形土器に対して省略した「甕」という用語を使用する。
- 4) 正確な名称は、「独立棟持柱をもつ掘立柱建物」である。
- 5) 伴野幸一の編年案が提示された後に、中居和志による近江地域全域を対象とした編年案が発表されている（中居 2010）。中居は伴野の視点に加え、高杯の形態変化を数値化して時間的変遷をたどる方法を採用し、編年の基軸としている。そのほかに、時期ごとの器種や形式の消長についても説明を加えている。本稿では、有稜高杯が口縁部の外反するものへ転換するとした、中居編年におけるⅠ-2 期から、小形器台が出現する以前の段階であるⅡ-2 期までを対象としている。この時期幅については、慣例的な時期区分におけるⅤ様式中葉からⅤ様式後葉に中居も対応させており、構成内容からみても伴野の後期中および新とした範囲とほとんど矛盾はない。
- 6) 各研究者の編年観の詳細な対応関係については、前後の時期を含めて別稿であらためて検討する必要があると理解している。
- 7) 近江地域の受口状口縁甕だけではなく、弥生時代後期後半の近

畿地方各地では、甕形土器の地域色が鮮明にあらわれることが知られ（高野 2002）、それらの広がり近年も注目されている（市村 2016）。壺形土器と対照的に、甕形土器の地域色が際立つ現象は、弥生時代後期社会を理解するための重大な変化としてとらえられる。甕形土器に着目することでどのような人びとの行動が復元できるのかという問題とあわせて、継続的に検討すべき課題として取り組みたい。

- 8) 口縁部の形状を分類の要素とすることは一般的に取り組みられる手法であるが、寺沢薫は、James Deets による「形式」の構造的な理解を参考に、弥生土器の形式分類における「4 次的形式」として口縁部の造形に注目している。「4 次的形式」を、「製作者のイメージとしては細部にわたるもので、製作者の意図とは別に、いわば「無意識の技術・手法の取得」という形でなされる場合もあるが、個人的なクセなどでは当然なく、またたんに技術の問題だけにとどまらず、流行・規制が作用していることが考えられる。厳密には範型として扱えられるもの」（寺沢他 1980:27）と説明し、さらにその上位概念である「3 次的形式」については、「機能細分の想定される形式もないではないが、むしろ形態的イメージが強く作用しているものと考えられる。従ってこの中で、きわめて多様性のある形式を生んでいる。製作者にとっては「造形のイメージ」と「成形作業上の方法」が交叉していると考えられる。そこには個人差を捨象しうる流行（時間性）と規制（集団・空間性）の範型が存在する。」（寺沢他 1980:27）と述べる。さらに、本稿の分析で扱う甕形土器の口縁部の形状差は、甕形土器の地域色が顕在化する弥生時代後期において、寺沢の示した「3 次的形式」に直接影響する要素である。したがって筆者は、口縁形状差の背後に、寺沢が論じるような「個人差を捨象しうる規制（集団・空間性）」が存在するという仮定にもとづき本稿の分析を進める。
- 9) 「有段」とした例のいくつかは擬凹線をもたないため、有段口縁の個体における系統性に注目する場合は、それらは別系統として理解し直す必要がある。
- 10) 「甕」と同様の理由から、受口状口縁甕に対して「受口甕」という省略した用語を使用する。
- 11) ここで示した比率は、代表例など湖南地域の遺跡出土例の計測をもとに、参考として示した数値であり、統計的な作業を経たものではない。
- 12) 図 11-1 は、石田遺跡から出土した湖南地域の特徴をもつ事例のなかでも精巧に製作された印象を受ける。さらに、胎土を観察したところ、器壁外面が灰白色かつ断面が黒色になるという湖南地域の受口甕の特徴（伴野 2000）をもっており湖南地域からの搬入品である可能性もある。搬入品であった場合、小地域の傾向を判断するうえでは除外して検討すべきであるが、石田遺跡出土甕のうち外面灰白色のものは少数ではなく一般的な事例であることも考慮して、今回は検討対象に含めた。
- 13) 栗東市下鈎遺跡はこれまでに数多くの発掘調査が実施されてきたが、集落内に河川が流れ込んでいるなどその集落景観は単純ではなく、ほかの対象遺跡のような範囲指定は困難であった。
- 14) 第八章で課題としているが、具体的取引された可能性のある遺物の分布状況等や流通経路については本稿では考察していないため、今後の検討が不可欠である。ただし、第七章で若干論じたように、湖南地域や湖東地域では、青銅器生産関連遺物が複数みついている。また、紹介した事例以外にも琵琶湖沿岸では、弥生時代後期後半に所属する青銅器生産関連遺物が報告されて

いるため、琵琶湖を介した流通品の一つに青銅器生産に関連するものがあつた可能性を考えることは不可能ではないだろう。

〔引用文献〕

- 赤塚次郎 2002 「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」樋上昇編『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財調査センター報告書92, 愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター, 25-48
- 市村慎太郎 2016 「後期タタキ甕の広がりについての素描」豆谷和之さん追悼事業会編『魂の考古学：豆谷和之さん追悼論文集』67-77
- 植田文雄 2000 「近江・湖東地域の弥生集落」『みずほ』33:76-89
- 岸本道昭 1998 「掘立柱建物からみた弥生集落と首長：兵庫県と周辺の事例から」『考古学研究』44(4):79-91
- 桑原久男 2012a 「近畿における弥生セトルメントシステム再構築は可能か：酒井モデルの批判的検討」『弥生時代の実像と動態を探る：モデル論を超えて』発表要旨集』近畿弥生の会企画シンポジウム, 1-12
- 桑原久男 2012b 「奈良盆地の拠点集落の面積をはかる」『みずほ』43:17-26
- 近藤広 1992 「土器からみた湖南の要素と湖東の要素：弥生時代後期後葉から古墳時代前期を中心に」『滋賀考古』7:29-40
- 近藤広 1994 「受口状口縁をもつ近江型土器の再検討：近江南部の受口状口縁甕を中心に」『滋賀考古』12: 65-71
- 近藤広 1998 「近江野洲川流域における中・後期の弥生集落」『弥生時代の集落：中・後期を中心として 発表要旨集』第45回埋蔵文化財研究集会, 117-136
- 近藤広 2001 「弥生後期における受口状口縁土器の様相：近江の地域区分と他地域への影響」西田弘先生米寿記念論集刊行会編『近江の考古と歴史：西田弘先生米寿記念論集』真陽社, 91-101
- 近藤広 2006a 「下鈎遺跡」『栗東市埋蔵文化財発掘調査2004年度年報』栗東市文化体育振興事業団文化財センター, 28-31
- 近藤広 2006b 「近江南部における弥生集落と大型建物」広瀬和雄・伊庭功編『日本考古学協会2003年度滋賀大会シンポジウム1 弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版株式会社, 11-27
- 近藤広 2009 「滋賀県における弥生時代後期の社会変化」『弥生時代後期の社会変化 発表要旨資料集』第58回埋蔵文化財研究集会, 235-242
- 近藤広 2010 『下鈎遺跡発掘調査報告書』栗東市文化財調査報告書, 30
- 近藤広・松村浩編 2011 『下鈎遺跡発掘調査報告書 平成22年度1次調査』栗東市文化財調査報告書, 41
- 佐伯英樹 1995 「近畿1（滋賀県）」『ムラと地域社会の変貌：弥生から古墳へ 発表要旨資料』第37回埋蔵文化財研究集会, 71-88
- 佐伯英樹 2001 「下鈎遺跡」『栗東町埋蔵文化財発掘調査1999年度年報』栗東町文化体育振興事業団埋蔵文化財調査課, 38-41
- 佐原真 1960 「弥生式時代」中村直勝編『彦根市史 上冊』彦根市役所, 88-107
- 滋賀県教育委員会 1976 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告Ⅲ－Ⅱ』滋賀県教育委員会文化財保護課・滋賀県文化財保護協会
- 1992 『針江北遺跡・針江川北遺跡(Ⅰ)』一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町遺跡発掘調査報告書, 4
- 設楽博己 2009 「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』149:55-90
- 杉浦隆支・植田文雄・奥田尚・植田弥生・能城修一・新山雅広 2005 『石田遺跡：能登川駅西土地地区画整理事業に伴う発掘調査』能登川町埋蔵文化財調査報告書, 58
- 杉本源造 1989 「近江弥生社会の動態」『古代学研究』119:1-25
- 高野陽子 2002 「近畿地方北部の土器」赤塚次郎編『考古資料大観2：弥生・古墳時代 土器Ⅱ』小学館, 229-236
- 高野陽子 2003 「出土遺物」奥村清一郎・竹原一彦・森島康雄・伊賀高弘・高野陽子編『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書33, 京都府埋蔵文化財センター, 70-135
- 都出比呂志 1979 「ムラとムラとの交流：集落と地域圏」樋口隆康編『図説日本文化の歴史1：先史・原始』小学館, 153-176
- 寺沢薫・森下恵介・藤田三郎・宮崎泰史・松本洋明 1980 「弥生土器」奈良県立橿原考古学研究所編『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書34, 奈良県教育委員会, 27-41
- 戸塚洋輔 2016 「近江地域」古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』101-130, 六一書房
- 中居和志 2010 「古墳出現前後の近江地域：土器編年を中心に」『立命館大学考古学論集V』125-148
- 中居和志 2013 「古墳出現期における受口状口縁土器群の動態」『立命館大学考古学論集VI：和田晴吾先生定年退職記念論集』219-230
- 中西常雄 1985 「近江における甕形土器の動向：庄内期を中心にして」『考古学研究』32(1):61-80
- 西邦和 2000 『佐生北遺跡(2次)・石田遺跡(6次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書49
- 西邦和・杉浦隆支 2003 『石田遺跡(13-2次)石田遺跡(17次)殿衛遺跡(1次) 長福寺(3次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書, 54
- 伴野幸一 2000 「湖南地域における弥生集落の動向：野洲川流域の弥生中期後半から後期の集落をめぐって」『みずほ』33: 60-75
- 伴野幸一 2003 『伊勢遺跡75次発掘調査報告書』
- 伴野幸一 2006 「近江地域：野洲川流域を中心に」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター, 49-66
- 伴野幸一 2009 『伊勢遺跡確認調査概要』伊勢遺跡確認調査報告書7
- 平井美典・中村智孝・中川正人・新山雅広・藤根久・竹原弘展・川本耕三・山田卓司・鹿又喜隆・酒井公美子・池田利晴編 2008 『柳遺跡Ⅳ』
- 藤田三郎 1999 「奈良盆地における弥生遺跡の実態」森浩一・松藤和人編『考古学に学ぶ：遺構と遺物』同志社大学考古学シリーズ7, 135-148
- 堀大介 2006 「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター, 21-46
- 松室孝樹 2000 「近江・湖北地域における弥生時代集落の様相：中期から後期を中心に」『みずほ』33: 90-104
- 丸山雄二 1995 『大塚遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料12
- 丸山雄二 1996 『大塚遺跡Ⅱ：弥生時代後期から古墳時代の集落遺跡の調査』長浜市埋蔵文化財調査資料, 14
- 森井貞雄 2001 「近畿地方の環濠集落」大阪府立弥生文化博物館編『弥生時代の集落』学生社, 135-155

森岡秀人 2000 「弥生集落研究の新動向 (IV): 小特集『琵琶湖周辺における集落の様相』に寄せて」『みずほ』33:105-124

森岡秀人 2006 「大型建物と方形区画からみた近畿の様相」広瀬和雄・伊庭功編『日本考古学協会 2003 年度滋賀大会シンポジウム 1 弥生大型建物とその展開』, サンライズ出版株式会社, 115-144

森岡秀人 2015 「倭国成立過程における『原倭国』の形成: 近江の果たした役割とヤマトへの収斂」『纏向学研究』3:39-55

守山市教育委員会 1983 『守山市文化財調査報告書』12

山下優久 2015 「弥生・古墳時代の独立棟持柱建物に関する考察」『筑波大学 先史学考古学研究』26: 23-47

横井川博之 2000 「湖西地域における弥生集落の様相」『みずほ』33:46-59

Flannery, K.V. 1998 The Ground Plans of Archaic States. In G.M.Feinman and J.Marcus(eds.), Archaic States, pp.15-58, School of American Research Press.

[甕形土器の分析で参照した報告書]

伊藤裕偉・大川操・豊田祥三・山岡奈美恵・鈴木一有 2005 『天竺寺丘陵内遺跡郡発掘調査報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財調査報告 259

大洞真白 2002 『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』32

奥谷博之 2005 『北府 A 遺跡』武生市埋蔵文化財調査報告 24

奥村清一郎・竹原一彦・森島康雄・伊賀高弘・高野陽子 2003 『佐山遺跡』京都府遺跡調査概報 70

小野木学・藤田英博・河瀬実浩・宗宮隆司・吉田靖・山本厚美 2015 『荒尾南遺跡 B 地区Ⅱ』岐阜県文化財保護センター調査報告書 131

木野本和之・石井智大・西口剛司・松葉和也 2009 『村竹コノ遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 123(9)

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013 『京都府遺跡調査報告集』154

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2014 『京都府遺跡調査報告集』160

小森俊寛・大洞真白・備前知世 2013 『美濃山廃寺 (第 8 次)・美濃山廃寺下層遺跡 (第 11 次) 発掘調査報告書』八幡市埋蔵文化財発掘調査報告 58

杉浦隆支・植田文雄・奥田尚・植田弥生・能城修一・新山雅広 2005 『石田遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書 58

滋賀県教育委員会文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 1992 『針江北遺跡・針江川北遺跡 (Ⅰ)』

清水政宏 2004 『山奥遺跡Ⅱ』四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 32

田中祐二・青木隆佳・井之口茂・今村峯雄・川本耕三・小林謙一・坂本稔・白川綾・杉山拓己・鈴木茂・西田京平・平尾良光・藤根久・堀口悟史・松崎浩之・光谷拓実・山口将史 2011 『府中石田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 121

成瀬正勝・鈴木隆雄・藤根久・新山雅広・植田弥生・今村美智子・

杉原麻記 2000 『砂行遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書 65

西邦和 2000 『佐生北遺跡 (2 次)・石田遺跡 (6 次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書 49

西邦和・杉浦隆支 2003 『石田遺跡 (13-2 次) 石田遺跡 (17 次) 殿衛遺跡 (1 次) 長福寺 (3 次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書 54

原田恵理子 2005 『天花寺丘陵内遺跡郡発掘調査報告Ⅲ - 1』三重県埋蔵文化財調査報告 180(2)

伴野幸一 1991 『伊勢遺跡発掘調査報告書 塚之越遺跡発掘調査報告書』守山市文化財調査報告書 42

伴野幸一 2003 『伊勢遺跡 75 次発掘調査報告書』

樋上昇 2002 『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財調査センター報告書 92

平井美典・中村智孝・中川正人・新山雅広・藤根久・竹原弘展・川本耕三・山田卓司・鹿又喜隆・酒井公美子・池田利晴『柳遺跡Ⅳ』

藤崎高志・汐見眞・白崎泰子・吉川昌伸 2010 『関津遺跡Ⅲ』

丸山雄二 1995 『大塚遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料 12

丸山雄二 1996 『大塚遺跡Ⅱ』長浜市埋蔵文化財調査資料 14

守山市教育委員会 1983 『守山市文化財調査報告書』12

吉田隆史 2011 『岸岡Ⅲ遺跡 (第 2 次)』

[挿図出典]

図1 守山市教育委員会1983をもとに筆者作成

図2 都出1979

図3 地理院地図(<https://maps.gsi.go.jp/>)をもとに筆者作成

図4, 5 筆者作成

図6 地理院地図をもとに筆者作成

図7 近藤1992

図8 近藤2001

図9 滋賀県教育委員会文化財保護課・滋賀県文化財保護協会1992; 丸山1995, 1996をもとに筆者作成

図10 西2000; 杉浦他2005をもとに筆者作成

図11 伴野2009; 丸山1995, 1996; 杉浦他2005; 滋賀県教育委員会文化財保護課・滋賀県文化財保護協会1992をもとに筆者作成

図12 筆者作成

図13 滋賀県教育委員会文化財保護課・滋賀県文化財保護協会1992をもとに筆者作成

図14 西・杉浦2003; 杉浦他2005をもとに筆者作成

図15 伴野2009をもとに筆者作成

図16 近藤・松村2011をもとに筆者作成

図17 近藤2010をもとに筆者作成

図18 筆者作成

図19 岸本1998

図20 藤田1999

表1, 2 筆者作成

Study on the use of urn-shaped pottery in the late Yayoi period and its background :Focusing on Shiga Prefecture

Yusuke YAMASHITA

This study argues that the Yayoi period Omi area was original and innovative, based on concrete data. In this study, the first-level analysis calculated the proportion of use of urn-shaped pottery with rim in different sites within and surrounding the Omi area. This analysis confirmed previous suspicions that the use of urn-shaped pottery with rim is unique and limited to the area under study. The second-level analysis measured the area of the settlements where urn-shaped pottery was mainly used. The measurements revealed the existence of a clear hierarchy in these settlements. In order to further study the common characteristics of the urn-shaped pottery used in different settlements, the author analyzed independent buildings on lifted columns, which comprised the third-level analysis. Due to the presence of these buildings in each subregion of Shiga Prefecture and the correspondence between the settlement scale and the size of the buildings, as well as the daily interactions based on urn-shaped pottery, the author presumes that there was a close exchange relationship among the elites in the settlements with the buildings.

Using this three-level analysis, the author shows that the interaction through Lake Biwa between settlements was active during the late Yayoi period. Further, the author challenges the theory that assigns high importance to the subregional evaluation of the Konan region and creates a foundation to understand the Omi area as a region that promoted the information exchange by establishing strong linkages around the shores of Lake Biwa during the transition from the Yayoi to the Kofun periods.